

あま市小中学校あり方検討委員会で頂いたご意見

全般

テーマ	回次	委員	委員意見・質問
全	1	山田委員長	<p>○学校のあり方の検討は、子供たち主体であるべき</p> <p>今後、この委員会で話していく学校のあり方についてです。教育長からの最初のあいさつで今後の10年を見通した議論をお願いしたいとお話がありました。その場その場の対処的ではなくて、先を見通して考えることは非常に意味のあることで、今変わりつつある事柄も吸収しながら、どうしていったらいいのだろうと話し合うことはとても大事であると考えます。</p> <p>例えば、35人学級の話があったり、小学校に教科担任制が導入されることであったり、GIGAスクールとICTについてであったりと、どうしていったらいいのだろうかとの総合的に考えることは、非常に意味のある事だなど、本日皆さんのご意見を聞かせていただきました。</p> <p>そのなかで、忘れてはいけないのは、子供たち主体であるということだと思います。子供たちがより良く育つために考えて行かなくてはならないと思います。子供の教育が縮小されたり、不利になるような状況にならないようにするというのを念頭に置かなくてはならないと考えます。</p>
全	1	小林副委員長	<p>○議論の順番により前提が変わってしまうので注意する</p> <p>幅広いテーマが設定されていますが、この議論の順番は①から⑥の順に進めるものか。6つのテーマがそれぞれ絡み合っている部分もあるし、順番が前後することによって前提が変わってきてしまうこともある。</p> <p>←事務局：本委員会は、市当局も含め、様々なお立場から幅広く委員としてご参加いただいています。様々なお立場から、それぞれの優先順位があると思いますので、それぞれのご意見がいただければと思います。これからどのように進めていくのかということも相談しながら委員会を進めていければと思います。</p>
全	1	早川委員	<p>○テーマによっては複数のテーマで検討をしていただければと思う</p> <p>今回のテーマは、どれも大きな課題ではありますが、テーマによっては複数のテーマで検討をしていただければと思います。例)「小中一貫校」を話し合うのであれば、「施設等の共有化・複合化」や「働く場としての学校」</p>
全	1	小林副委員長	<p>○あま市の教育ビジョンと現状への認識の共有</p> <p>そして、⑦のその他に「あま市の教育ビジョンと現状への認識の共有」とさせていただきます。子の優先順位を確定する上でも、「あま市が今どんな教育を目指し、将来的にどんな教育をしていきたいのか(どんな子どもを育ていきたいのかと同義でもあると考えます)」という方向性を委員のみなさんの間で揃えておくのは大切だと考えます。今に直結することができることからやっていくことが大切とも思いつつ、この会議自体は大きなビジョンに向けてどうすれば実現できるかを検討する場であると理解しています。その点で、各論に入る前に委員さんの中であま市の目指す教育の大きなビジョンを改めて共有しておきたいです。現状についても、第1回の資料で詳細なデータも含めて整理していただき、ありがとうございました。個人的にあま市の現状に対して不勉強な点の多さも実感しており、各テーマについて知りたいことがたくさんあります。委員のみなさまもそれぞれの専門分野外のところで、現状をより詳細に共有すべき点はあるのではと思います。ビジョンを共有しつつ、現状についても課題など丁寧に確認しながら、議論ができると幸甚でございます。</p>
全	1	早川委員	<p>○現在の市の財政状況や施策状況等を認識していただけるような資料の提供をします</p>

			企画政策課の立場としては、「施設等の共有化・複合化」や「小中一貫校について」意見を聴取するのであれば、施設の複合化や統合といった施設面のことを検討していただくことになるので、委員の方々には現在の市の財政状況や施策状況等を認識していただけるような資料を提供するなどして意見聴取していただきたい。
全	2	小林副委員長	<p>○あま市学校教育関係予算について</p> <p>児童生徒数が減少しているなか、教育費総額が増加しているのに違和感を覚える。</p> <p>事務局：GIGAスクール以後については、GIGAスクール関係予算が毎年かかってきており、エアコン工事以後については、エアコン運用に係る光熱費が加算されています。</p> <p>教育長：小中学校17校全体の予算であるということで、多少の児童生徒数の減少では大きく予算の削減は見込めない。学校1つ1年間の維持管理運営を考えたとき、児童生徒数とはかわりなくかかってくる経費がある。学校を一つ運営するには、最低限これだけかかるという経費がある。そういった意味では、小規模な学校は児童生徒数と比較すると費用対効果の面では良くはないともいえる。ただ、お金の面だけで学校の数をはかるのではなく、児童生徒や住民にとって、どのような形が良いのかを考えなければならない。</p> <p>施設が一つあることによって、設備の維持管理の経費が積みあがってくるということが良く分かりました。そういった意味で、学校を一つにまとめることによってコストカットははかれるであろうということも分かりました。</p>
全	2	山田委員長	<p>○ソフト面での今後の展望について</p> <p>ソフト面での今後の予定している展望は何かありますか。</p> <p>事務局：直近では、来年度の予算要求しているものとして、学校でのICT利用教育の面で、教職員の研修も予定していますが、さらに現場においてICT支援員の配置を計画しています。単なるインストラクターではなく、教育現場においてコンピュータの利用教育を教職員と一緒に考えて行くことを期待しています。</p>
全	2	溝口委員	<p>○地域住民の声を十分に聴いて実施をしてほしい</p> <p>地域住民との関係は大変重要で、住民の声を十分に聴いていただきたいと考えます。</p> <p>委員長もおっしゃっていましたが、あくまで、子供中心に考えていただきたい。これを大前提で進めていただきたい。</p>
全	2	加藤委員	<p>○チーム学校で学校運営を行っていききたい</p> <p>様々な経費が学校運営にかけられていることがよくわかった。</p> <p>学校運営について、チーム学校という形で、地域や保護者といっしょになって行っていききたい。子ども達にとって何が良いのか、良い学校になるようにコーディネーターを中心に地域の方々の力を借りながら学校運営を行っていききたい。</p>
全	2	恒川委員	<p>○場合によっては計画を変更することも選択肢に</p> <p>時間をかけて策定した計画であっても、もちろん計画通り着実に進めていくことは重要ではあるが、時間がかかっているからこそ、計画策定時から実施時に状況が変わってきている時もあるため、その時その時の状況をしっかりと見極めて、子ども達を中心に考えて行くことや地域の方の意見を重要視するためにも、時には大胆に計画から変更することも選択肢に入れることが必要であると考えます。</p>
全	2	山田委員長	<p>○学ぶ力について、共生について</p> <p>教育立市プランは良くできているという感想です。</p> <p>なかなか立市プランという名称を使うことはないため、すごいなと思った。</p> <p>施策1学校の教育力を充実させ、あまっ子の学ぶ力を高めると施策2人に思いやりを持ち、共に生きるあまっ子を育む及び施策3開かれた学校づくり、特色ある学校づくりを進めるにも関連してくるが、「学</p>

			<p>ぶ力」というのがキーワードになってくると考えます。</p> <p>これから、小中一貫校になるのか、こういった形になるかは分かりませんが、どんな形になるとしても、この「学ぶ力」を高めるような形で持って行かなければならないと考えます。</p> <p>この教育立市プランは、10年の目標とお聞きしました。OECDで生徒エージェンシーだとか教師エージェンシーとあって、エージェンシーという用語を用いています。主体的で自分たちでどんどん学んでいく力を身に付けていくということが主眼となっている。</p> <p>先ほどの水泳の授業でも話が出ましたが、やりたい子、出来る子は、自分でどんどん進めて行けるような、そういった授業の形にもっていったらいいなと思いました。これらはソフト面ですが、そのソフトが生かせるようなハードづくりを検討していければと思います。</p> <p>施策の2は、「共生」です。愛知県でも非常に大切にしている考え方です。少ない人数の学校でも、それを生かしつつ交流していくことができるかというかと考えます。その場合、ICTを利用することが重要になってくる。工夫をすればいろんなことができる。</p> <p>いろんな小規模校の様子をみると、どうしても肯定感が高まらないケースを見受ける。同じメンバーでやっているのに、出来る子はボスになってしまい、出来ないはずとできないままという感触を得てしまう。そういった状況を打破するためには、他校とつながって、つながりを意識することが一つの手段であると思います。そのあたりも今後の課題となる共います。</p> <p>様々な課題を考える際に、子ども主体に考えることが重要である。</p>
--	--	--	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

テーマ1 小規模校と大規模校について

テーマ	回次	委員	委員意見・質問
1	1	山田委員長	<p>○小規模校がどんな状況からその様な状況に至ったのか。</p> <p>あま市内の小中学校でも小規模であったり大規模であったりしますが、小規模校がどんな状況からその様な状況に至っているのかを教えてくださいましたらと思います。</p> <p>←事務局： 近隣地域における小規模校と大規模校についてですが、全国的な少子化の流れの中で、どの自治体も児童生徒数が減少傾向であるという事は言えます。また、近隣市の愛西市、清須市、弥富市もそうですし、あま市もそうですが、いわゆる平成の大合併によって新たに誕生した市です。隣り合った町が合併する中で、どうしても人口の多いところ、少ないところが一緒になっているというところがあるので、市になった後はどの市も地域による人口の偏りが発生してきます。対等合併であったとしても、もともとの町の人口の違いが地域の人口の違いとなっています。</p> <p>近隣市においても、その人口の偏りによる小規模校と大規模校が混在する問題について、話し合われてはいますが、具体的に解決策を実施したという話は聞いていません。</p> <p>どの地域についても話し合われているのは、小中学校のあり方①小規模校と大規模校の資料2ページにあるように、学校の統廃合又は通学区域の再編となっています。</p>
1	1	加藤委員	<p>○あま市役所新庁舎が建てられることによる展望と小中一貫校となったときの通学距離は</p> <p>現在、宝小学校はあま市の中で一番小さな学校です。開校してしばらくたった時期は、900人を超えるような大規模校で、宝小学校から秋竹小学校が分離独立した経緯もあります。</p> <p>秋竹小学区は少し人口が増えているようですが、宝小学区は先ほどのグラフを見て頂いても分かるように、どんどん児童数が減少していく見込みです。あま市役所新庁舎が建てられることにより、あのあたりの住宅がどのようになっていくのかという展望や、小中一貫校の是非について、通学距離はどうなるのかといったことも考えて行かなければならないと思います。今は私がいる宝小学校の話しかしていません</p>

			んが、市内全ての学校の子供たちが良い教育を受けられるような話し合いができればと思います。
1	1	佐藤委員	<p>○近隣市町の人口減少の動向は</p> <p>人口減少の件については、あま市のみならず全国的に抱えている問題化と思いますが、私自身も近隣市町の状況について自分でも調べてみて次回以降の会にのぞみたいと思います。</p>
1	1	恒川委員	<p>○秋竹小学区、宝小学区の今後の動向は</p> <p>先ほど、林理事長さんが七宝小七宝中卒業とおっしゃっていましたが、私個人は宝小、七宝北中卒業です。私が宝小に通っていた時代は、いわゆるマンモス校でした。運動場にプレハブ校舎が建っていて、在学途中に秋竹小学校が出来て、秋竹小学校に通学するようになる子たちに皆でさようならと手を振った記憶があります。その当時にことを思うと、大変寂しい状況にあると思います。</p> <p>先ほど、財政課長からも指摘がありました。秋竹小学区で区画整理事業が行われて、若干若い世代の流入があり、若干人口が増えつつあると理解しています。保育園においても、今後利用者が増えるだろうと注視しています。また、先ほど教育長からも指摘がありました。令和5年5月にあま市役所新庁舎が建設され、大字沖之島の地区にも若干住宅が建つ地域が増えると聞いています。保育園としても、この地域についても、今後利用者が増える可能性があると考えています。</p>
1	1	山田委員長	<p>○深刻なのは小規模校。これから様々な教育活動の中で支障が出てくる可能性がある</p> <p>あま市における大規模校の状況を見た場合に、他市で言えば中規模程度にあたるかと思えます。特に大きな支障があるとは思いません。深刻なのは小規模校であると考えます。これから様々な教育活動の中で支障が出てくる可能性があります。特に、他者との関りの中で生き方を学んでいくということを考えたときに、閉ざされた同じメンバーでの学級編成は苦しいものがあります。やはり複数学級が望ましいと考えます。まずは、小規模校の解消から着手すべきであると考えます。</p>
1	1	溝口委員	<p>○早急に結論を求めるのではなく、慎重に検討を</p> <p>適正配置・規模に関しては大変重要なテーマであるが、極めて難しい問題も含まれ、早急に結論を求めるのではなく、まさに全市的な立場であらゆる角度から慎重に検討すべきであろう。</p>
1	1	加藤委員	<p>○2・3学級ぐらいが適当であると思う</p> <p>子ども達が多様な考えをもった中で育つことは、今後の生き方にも関わってくると思う。2・3学級ぐらいが適当であると思う。大規模小学校では、特別教室や運動場、体育館の使用割り当てを組むのが難しい。新校舎の建設も考えた方がよいのではないと思う。教室が狭く、30人でも狭い教室の学校もある。</p>
1	1	安江委員	<p>○小規模校のメリットとデメリット</p> <p>小規模校の場合、大規模校と比べ、子どもたちによく目が行き届くというメリットがあるが、子どもどうしが切磋琢磨して能力を伸ばしていったり、多様な考え方を身につけたり、多様な考えを理解したりするといった面において、デメリットを感じる。また、小学校で少人数、中学校でも少人数となると、クラス替えをしても人間関係が固定化してしまう面がある。慎重な検討を要すべきであるが、統廃合や学区の再編等により、大規模校とまではいなくても、中規模が望ましいのではないと思う。</p>
1	2	山田委員長	<p>○今後の児童生徒数増加の見込について</p> <p>新入学児童生徒数推移について、新たな団地等の建設などを考慮しない、現在の人口からの推移とお聞きした。学校によっては、一桁人数しかいないという大変衝撃的な数字であるが、今後大きく人口が増える要因となる何かはあるか。</p> <p>事務局：前回、都市計画マスタープランを考慮してというご意見がありました。都市計画マスタープランについては、つい先日、新たなものが策定されたところです。この新たなマスタープランを見てみると、宝小、秋竹小の学区では、防災関連である程度の計画がなされて</p>

			<p>いるようですが、それにより急激な人口増が見込めるような内容ではないようです。むしろ、この地域は人口が減っていく予測になっています。</p> <p>市全体では、9万人の人口を維持することを目標とした計画となっています。</p> <p>教育長：甚目寺地区はある程度の増を見込めても、七宝・美和地区については、市街化調整区域の市街化区域化が見込めないため、大きな人口増は考えにくいと思っています。秋竹地区では区画整理が行われて、若干の児童生徒数の増加はあったようですが、ほんのわずかです。</p>

テーマ2 小中一貫校について

テーマ	回次	委員	委員意見・質問
2	1	山田委員長	<p>○小中一貫校のメリットは</p> <p>義務教育学校は、近隣では飛島村が先行して進めてきていると思いますので、分かる範囲で飛島村がどんな状況か教えていただけたらと思います。特にどんなメリットがあるのかという点について。飛島村の取組については、まだ始まったばかりの取組ですので、成績への影響など効果測定がしっかりとされている訳ではないようです。施設はきれいです。</p> <p>一貫校とか義務教育学校について、私も何校か開始して2年ほどたつ学校に研究で入って見てきました。非常に良い形で進んでいました。何が良いかというと、地域がバックアップしてくれている。複数の学校が一つになったんですが、新しい学校を作っていこうというポジティブで前向きな雰囲気がありました。毎日のように地域の方がいらっしゃって、バックアップされていた。そういう環境が生まれてくるという状況は、とても大きいと思います。どこかを潰すとか、統合するだとかよりも、新しいものを作っていくというイメージがとても大事であると私は思いました。小中一貫校であるとか義務教育学校であれば、教科担任制も上手く運営することができます。教員の数も確保できます。教員の仕事も分担しやすいので、メリットは大きいと思います。そういったことも、この委員会で話をして行ければと思います。</p> <p>←事務局：小中一貫教育のメリットについてですが、従前の6-3制の教育にかかわらず、例えば4-3-2制など自由に組み換えが可能であるということです。また、例えば従前では3年生で学習していたものについて、前倒しをして学んだりするなど、順番を入れ替えるなどの教育課程の特例が設けられています。これらにより、小学校6年生から中学校1年生に進学するにあたって、科目が増えるなど、現状では大きな段差があるわけですが、その移行をスムーズに進めることによって、9年間を一貫して教育することができるというメリットがあります。</p> <p>飛島村の状況については、すぐさま一気に移行することは中々難しいとも聞いています。</p> <p>飛島村の状況について聞いている範囲でご案内申し上げます。飛島村の小中一貫教育についてはしばらく経っていますが、義務教育学校となったのは、ここ数年のことであると把握しています。</p> <p>当初は、小学校と中学校にそれぞれ校長がいて、義務教育学校になって1人の校長となったとのこと。</p> <p>小学校5年生、6年生と中学校1年生を一つのセットとしているようで、小学校1年生から4年生、小学校5年生から中学校1年生、中学校2年生から3年生と三つのステージに分けて行っているとのこと。</p> <p>従来の小学校、中学校の種類では別々の施設で学ぶ子供たちが、一つの施設で学んでいますので、地元の中での幅広い年代での交流が可能となっていると聞いています。</p>

			<p>しかし、従来の小学校では6年生は最高学年として、学校をひっぱっていくリーダーとして、学校の看板としての自覚が子供たちに芽生え、またそのように振る舞うわけですが、義務教育学校では、さらに上の学年がいることによって、6年生が他の学校にみられるような最高学年としての自負やリーダーシップが生まれにくいという部分もあるようです。</p> <p>施設面ではとても充実した施設設備で教育が行われているうえ、オープン教室のような取り組みも行われていることもあり、多彩な教育活動が展開されているというのが、視察等で見聞きした感想です。</p> <p>公共施設の再配置計画があるところだが、小規模校であっても学校の統廃合をするということは、地域の方々にとっても行政にとっても、とてもハードルの高いことであると言えます。学校を廃校とするということではなくて、新たな制度として3つの学校で新たな形の一つの学校を作るというような意識改革が必要なのではないかと考えます。</p> <p>仮に小中一貫校をつくるということになるのであれば、議会の同意も必要であるし、増築や改装も必要になります。しかし、長期的にみれば、小規模であろうと3校あるのと、規模の大きな1校と比べたときに、運営経費は違ってくると考えています。</p>
2	1	古川委員	<p>○都市計画マスタープランを注視すること。</p> <p>学校の統廃合についてです。七宝地区の秋竹小学区については、近くに都市計画による区画整理事業が出来る前までは人口が減少傾向にあったわけですが、区画整理事業をしたことにより、人口が増えてきているのかと想像しています。街の賑わいも、そのあたりは出てきているのかと思います。七宝地区の特に秋竹小地区について、最初は規模を縮小する計画であったと思いますが、時代を経ることにより変わってきているのではないかと思います。都市計画マスタープランが今年度末に完成する予定です。この都市計画マスタープランは、街の10年後のヴィジョンを描くものです。例えば、市街化区域を見直しましょうであるとか、この地域は工場等企業誘致をして街を活性化していきましょうであるとかです。そういった市の大きなヴィジョンを描く計画が、今年度末にできます。そこでは、市長は9万人の都市を目指していきましょうと語っています。市長は、人口は衰退していくのではなく、人口を増やしていきましょうというような計画を描いていますので、都市計画マスタープランで、今後どの地域にどの程度人口が流入してくるのかを考慮する必要があるのではないかと考えます。その計画と、再配置計画とのマッチングを再度考えて行く必要があるのではないかと思います。このあたり、いかがでしょうか。←事務局： 人口動向をどのように検討していくかについてお答えします。</p> <p>甚目寺地区と七宝地区では人口の偏りが大きくあります。七宝地区と美和地区を足した数で甚目寺地区と同じくらいです。七宝地区の小学校4校を合わせて甚目寺地区の大きな学校よりある程度大きい程度ともいえるくらいの偏りが見られます。</p> <p>この人口の偏りは、市街化調整区域の分布が大きく関係していると考えています。市街化調整区域では新しい住民が家を建てて入ってくる事ができないため、市街化調整区域が多く分布する地域の人口が増えにくい件について、学校教育課としてもなんとかならないかと思っています。</p> <p>市街化調整区域が外れて人口が増えてくれば、児童生徒数も増え、小規模校の対策にもなります。</p> <p>特に市内では、秋竹小学区、宝小学区が現在小規模校で人口が増えにくい地域となっていて、秋竹小学校と宝小学校は、現在1学年1クラスの状況が続いています。</p> <p>もともと、秋竹小学校も宝小学校も500人規模の学校でした。人口の動向は、注視しなければならないと考えています。</p> <p>しかし、学校教育課は市街化調整区域がどうなるのかということ</p>

			<p>は、結果を待つしかない問題であることから、意見を言いづらい問題でもあります。都市計画マスタープランは注視する必要があると考えます。</p> <p>市役所の新庁舎が出来てくれば、七宝北中学校区は市の中心部になってくると思われます。都市計画マスタープランを念頭に入れながら、学校のこれからのあり方について、制度をうまくつかって考えて行ければと思います。</p>
	1	溝口委員	<p>○地域住民の思いについて</p> <p>私はかつて適正規模の関係で関わったことがありました。</p> <p>その時に私が思ったのが、三つの町が合併して市になったのですが、それぞれの地域の方の思いというのは、とても強いということです。例えば、かつての時に聞いた意見として、美和地区の子がなぜ七宝地区に行かなくてはならないんだというもの、ものすごくありました。</p> <p>地域に対する思いがものすごくある中で、一つの市となる意識を皆さんに持っていただけるような工夫が何かできないかと思ひます。大変難しいとは思ひますが。</p> <p>私自身が住んでいる地域でも、先日地域のイベントを行ったときに隣の地区に住む子がやってきたときに、なぜ他の地域の子も一緒にやってきてクリスマス会をやるのかという意見が出た。そういう考え方をしている方もいる。私は一緒にやればいいんじゃないのかと思うのですが。そういう地域の考え方を打破できないものかなと、強く思ひます。</p> <p>教育委員会で作っている教育立市プランについて、現在改定中とお聞きしますが、そういったものも我々は参考として、学校のあり方について考えて行ければ良いと思ひます。</p>
2	1	林委員	<p>○小中一貫校が地域の魅力となるのでは</p> <p>話がずいぶん壮大で、どのようにお話しするか、とても迷うところなのですが、私はこの会議でも人口が減少していると話題に出ている七宝地区の出身です。</p> <p>私は、小学校中学校は、七宝小と七宝中を卒業しました。</p> <p>高校卒業後はずっと東京にいて、東京で仕事をしていまして、2000年にこちらに戻ってきました。</p> <p>私が小学生、中学生のころは、宝小もとても児童数が多かったので、20年後あま市に戻ってくる際、七宝町も発展しているだろうと思ひて戻ってきました。そのようにイメージして戻ってきたところ、あそこにあったお店はない、あのスーパーもないという状況でした。市民プールもない、七宝地区にあつては図書館もない、公園もないと、住みたいと思わせる理由がないのです。同級生は、もう全員地元にはいません。まことに申し訳ないですが、住む理由がないのです。私もその現状を見て、名古屋市に転居し家も買って離れています。あま市の歯医者さんお医者さんも多くが名古屋市の方の東の方に住んであま市に通っていると聞きます。あま市に住んでいないんです。</p> <p>私は、あま市が住むところとして選ばれる理由として、教育がその理由となれば良いと思ひます。たしかに議会など越えるべきハードルは高く、簡単な話ではないと思ひますが、小中一貫教育というのは、私からすると新しさと可能性を感じました。</p> <p>先日、金融機関の方と話をした際に出た話ですが、名古屋支店に転勤してきたときに、こつちのエリアには誰も住まないんです。スーモなどの検索サービスで住宅を検索するとき条件としてあま市がひかかるようなものに教育がなれば良いと思ひます。例えば、あま市は教育的に魅力があるようなところであるとかです。例えば、インフラで鉄道を引っ張ってくるというのは今の時代不可能です。しかし、教育であれば、人口が少ない地区の話があつたり、人口の多い地区の話があつたりしましたが、人口の少ない地域でも可能な話なのではないかと思ひました。小中一貫教育については、詳しくないので感想という側面が強いかもかもしれませんが、新しさと可能性を感じまし</p>

			<p>た。あま市もちよっといいかもね、と思ってもらえるようなようになればいいと思います。</p> <p>働き盛りで、一番税金を落としてもらえる年代に選んでもらえるようなあま市になればいいと思います。甚目寺と七宝では温度差があるのかもしれませんが、七宝出身の私からすると、そういう人たちが住みたいと思えるあま市になっていないと感じます。教育が起爆剤となれば、魅力となれば良いと思います。</p>
2	1	恒川委員	<p>○小中一貫校の建設には子育て支援施設との共有を視野に入れて検討</p> <p>小中一貫教育について具体的に計画が動き出すことになった場合には、子育て支援課としても小学校で児童クラブや子ども教室などで学校施設を利用させていただいていますので、施設面でも考慮に入れてご検討いただければと思います。</p>
2	1	山田委員長	<p>○小中一貫教育のメリットについて</p> <p>小規模校と大規模校の課題を解決していくためのプラス思考の解決方法が、小中一貫校や義務教育学校であると考えます。通学の距離が長くなるというデメリットはありますが、それ以上に適正な人数で質の高い教育活動を進めるのにメリットがあると思います。学校行事はもちろんですが、授業の中でも対話的な学びを実現させていく上で大きな効果が期待できます。</p> <p>道徳教育の立場からも異年齢での交流が中学校にまで広がることは、思いやりや親切等の道徳性を養う上でも大切なことであると思います。会の中でもお話をしましたが、小学校の教科担任制や外国語活動・英語の授業の充実にも大きなメリットがあります。中1ギャップの解消にも大きな効果が期待できます。そして、地域が新しい学校への注目を集め、連携が密になると考えられます。</p>
2	1	小林副委員長	<p>○時間をかけて方向性を論じていくべきテーマであり、地に足をつけた議論ができたらい</p> <p>①②を4番手としておりますが、話さなくてはいい話題ではなく、むしろ、他自治体の事例、教育学的な理論、資金やリソース含めたあま市の現状を踏まえて情報を整理しながら、時間をかけて方向性を論じていくべきテーマかと考えます。正直、小中一貫校は個人的には魅力的と感じるものであり、夢物語ではなく地に足をつけた議論ができたらいと思います。それゆえに、例えば検討委員会で常に議論を続けていくテーマとしてもいいのではないのでしょうか。</p>
2	1	溝口委員	<p>○訪問して実態を知るなど、十分理解し課題を共有</p> <p>メディアなどでも話題になっており、現状のあま市においても検討すべき最も必要なテーマの一つであると思う。様々なメリットがある反面課題もあると思う。出来れば、導入している近隣の学校、県内の学校を訪問して実態を知ること必要ではないだろうか。一貫校について十分理解し、問題点などを洗い出し、同じテーブルで課題を共有したらどうかと思う。</p>
2	1	溝口委員	<p>○一貫性のある方針を貫いてほしい</p> <p>小規模校と大規模校及び小中一貫校については、関連性が強く教育の本質から逸脱しないで、一貫性のある方針を貫いてほしい。</p>
2	1	加藤委員	<p>○小中一貫校は魅力的。あま市の旧町や学区の枠をはずして考えた方がよい。</p> <p>通学の事を考え、あま市の旧町や学区の枠をはずして考えた方がよい。義務教育9年間の系統性や、小学校でも教科担任制のことを考えると、小中一貫校は魅力的である。今後、七宝北中学校区で一貫校を考えた時、人口増加も考慮した校舎建設をお願いしたい。</p>
2	1	安江委員	<p>○小中一貫校のメリット</p> <p>小中一貫校には、実現に向けて様々なハードルがあると思われるが、地域社会における子どもの社会性育成機能を高める意味で、深い意味があると思われる。特に中1ギャップは、小学校と中学校の生活様式に大きな壁を感じるにより、現象として起きている。それを解消する意味でも、また9年間のスパンを義務教育として設定することに</p>

			より、子どもたちがこの先の進むべき道が明確に把握できるというメリットがある。また、小中お互いの教員にとって、それぞれに継続的な指導が展開できる。
2	2	古川委員	<p>○児童生徒数減少をとどめる課題解決となれば</p> <p>小規模校の解消は重要であると考えている。私が住む地区の秋竹小は1クラスしかないわけですが、アットホームでいいんじゃないか、コミュニケーションを豊かにしていくには小規模校も有効な面もあるんじゃないかと思う一方、2クラス、3クラスあるような規模が無ければできないこともあるということも理解しました。</p> <p>宝小、秋竹小の児童数がかなり少ない状況であり、今後の推移でも少ない状況が推移する。学校の統廃合又は、小中一貫校が、解決策のひとつであると思います。</p> <p>仮に小中一貫校をつくるとしたときに、規模はどの程度が適当なのか、他の校区から越境を認めるのかということも考えて行かなければならないと思います。</p> <p>小中一貫校をつくるとした場合は、学区の児童生徒数減少をとどめる課題解決となればいいと思います。</p>
2	2	早川委員	<p>○子ども達のことを考えながらもスピード感を</p> <p>宝小学校の新入学児童数が、令和8年に一桁となる。</p> <p>総合管理計画や再配置計画を作成したのは、企画政策課ですが、2つの計画を策定するのに4年間かけて作っています。学校の施設においても、複合化について計画内で記載されている。ソフト面も大切ではあるが、ハード面である施設の複合化、小中一貫校についても重要なテーマである。</p> <p>令和8年入学という、これからまだ4年あると思うかもしれないが、ひとつの計画をつくるだけでも2年かかっていることを考えると、時間はない。計画を作る際にも、パブコメにかけたり、市民の方の意見を聞くために市民会議を開催したり、市民アンケートをとったりして、いろんな市民からの意見を聴取して作った計画です。</p> <p>重い課題ではあるが、子ども達のことを考えながらも、スピード感をもって進めていければと思います。</p>

テーマ3 施設等の共有化・複合化について

テーマ	回次	委員	委員意見・質問
3	1	古川委員	<p>○施設の共有化をぜひ進めてほしい</p> <p>施設の共有化についてです。財政課としては、ぜひ進めていただきたいと思います。平成29年度から令和3年度の5年間だけみても、小中学校の経費は、予算でみると48.9億円つかっています。また、給食センターが令和元年に改修しておりますが、こちらは32億円かかっています。これらを合計すると、この5年間での学校関係経費として80.9億円つかっています。これは相当多いと言えます。施設の老朽化対策は、積極的に行っていくべきですし、今後持続可能な小中学校、教育行政を担っていくためには、老朽化対策は不可欠であると考えます。施設の長寿命化計画を進めていく必要があると思います。そう考えたときに、学校施設として今ある全ての施設を使っていくものかどうかという議論をしていただく必要があるのかと思います。学校には、プールなど他にも様々な施設があると思いますが、本当に必要な施設は何かということを見定めて、持続可能な教育に必要な学校施設の選択をしていただきたいと思います。施設を使用していくといこうとになれば、そこには予算が必ず必要となります。ぜひとも共有化を進めて、財源をねん出するという考え方が必要ではないかと思います。←事務局： 制度の複合化については、とにかくやっていかななくてはならないと考えていますが、その方法が非常に難しい。35人学級が進んでいったとき、学校の中で施設の複合化を進めて行けるのかという不安もあります。</p> <p>甚目寺西小学校のように余裕教室が生まれるのと逆に教室数が足りなくなって校舎の増築をしなくてはならないところもあります。何</p>

			<p>年か過ぎてピークを越えれば減少に転じる見込みでもありますが、まだ学区には田も多く残っており、それらの田が売られている状況を考えると、さらに増えるのではないかと心配もしています。</p> <p>困難さはあるとしても施設の複合化は進めなくてはならない問題であると考えています。例えば、生涯学習であるとかスポーツ施設であるとか、学童などの子育て支援施策、放課後子ども教室などが複合化の候補として挙げられると思います。</p> <p>共有化について、現状を鑑みるに一番導入しやすそうなものは、プールがあたるのではないかと思います。</p> <p>しかし、残念ながら、あま市には市民プールがありませんので、民間のプールが近くにある学校で、送迎がしてもらえる場合が検討の候補としてあげられるのかなと思います。</p> <p>ただし、正直に申し上げると、とても高い。民間のプール施設から、かつて提案を受けたこともあるのですが、そのままプールを持ち続けるのと大きな差はないという感触を得ています。それでは、武道場ではどうか、体育館ではどうかと考えたとき、最低限屋内運動場は学校教育に必要なのではないかとあるとか、いろいろあって、共有化は進みにくいのかなと考えています。</p> <p>現場の先生からすると、今でも、やれ金融教育だ、何とか教育だと様々な教育内容のニーズは多々あるのに、そもそもの授業時数が少なく、そのうえでプールの授業に移動を含めて2コマとられるのは大変厳しいという声も聞きます。中々進みにくい原因の一つとなっているかと思っています。</p>
3	1	早川委員	<p>○公共施設等総合管理計画に基づいた施設の共有化、複合化の推進を</p> <p>説明の中にもありました、公共施設等総合管理計画であま市における公共施設が老朽化が進んでいるので、今後どのようにしていくのかという計画を策定させていただいています。</p> <p>計画の中に記載のある内容ですが、あま市の全公共施設の45%が学校施設です。この学校施設を含めた公共施設の25%を削減しましょうというものが、公共施設等総合管理計画になります。</p> <p>そのなかでテーマとして挙げられている施設の共有化、複合化を始め、校区の見直しや統合、配置・規模の適正化の問題も記載されています。</p> <p>教育長もおっしゃっていましたが、計画を策定する時にも、施設の廃止という表現ではなかなかご理解を得にくいというご意見が出ていました。面積上、施設の統合という表現となっていますが、併せてあらゆる検討を行いますとも記載があります。</p> <p>本委員会においても、小中一貫校、共有化や複合化についてもご議論いただいて、進めて行けるようお願いできればと思いますが、計画ではどのようなになっているのか等の意見は申し上げることができると思います。</p> <p>プールの共有化について、先ほど学校教育課から金額的に大きな差が見込めなかったという話もあったので、次回以降に金額的なところも提示いただけると良いかなと思います。</p>
3	1	山田委員長	<p>○小中一貫校や義務教育学校の設置と合わせて議論を</p> <p>これも避けて通れない問題の一つです。まずはプールの使用からになると思います。小中一貫校や義務教育学校の設置と合わせて具体的な方策を考えて行くことが必要になると思います。特に財政面での圧迫がなくなるよう工夫する必要があるかと思っています。</p>
3	1	佐藤委員	<p>○施設の共有化、複合化は地域住民の多様な学習環境の創出などにつながる期待がある</p> <p>学校施設の複合化、共有化のテーマは学校施設の抱える様々な課題や児童生徒数減少もふまえて、他のテーマとも関連性もあることから、優先的に話しあうテーマだと思っています。施設の共有化は児童生徒のみならず、地域住民の多様な学習環境の創出、公共施設の有効活用、維持管理における財政負担の軽減などにつながることに期待できると</p>

			<p>思います。学校の施設などの差で生まれる学習の機会のロスをうめたり専門知識を持つ人材による部活動の指導など、児童生徒に多様な学習形態や体験活動を可能にし、地域コミュニティの形成強化につながると考えています。</p>
3	1	加藤委員	<p>○移動の事を考えると現実的ではないように思う 移動の事を考えると、現実的ではないように思う。小規模校だから教室余剰があるとは限らない。</p>
3	1	安江委員	<p>○共有化のメリットデメリットと複合化のすすめ 施設の共有化について、プールの共用においては、経済的にも施設維持においても有効であると考えますが、校舎等の施設設備の共用は、管理運営上からしても、果たして必要かとなると、やや疑問は残る。複合化については、「地域とともにある学校」「コミュニティスクール」といった観点からも望ましいと思われる。またそれは、この先部活動が教員以外の指導者に委ねられていく現状を鑑みると、地域がサポートするという意識を醸成していくうえで必要なことかもしれない。いずれにしても、施設の老朽化への対応が必要となってくる。</p>
3	2	山田委員長	<p>○民間プールの活用について 名古屋市照会の一覧表をもとに効果と課題について、事務局としてはどのように考えているのか。 事務局：経費の面のみでは、効果が期待するよりも少なく、金額以外の面で各市が民間プールの活用効果を得ていることが分かりました。 調査結果及び見積書によって、複数校でのプールの共有では調整に苦慮している様子や、民間プールを活用することによってインストラクターの活用により授業効果が得られていることが分かりました。</p>
3	2	古川委員	<p>○民間プール活用のきっかけについて 各市町の民間プール活用のきっかけについてプールの老朽化によって仕様が困難となったときに活用するか否かを検討したものか、小規模校として転入数の推移がみこみにくい場合に老朽化もあるので民間に委託する検討のきっかけになったものか、いずれか。 事務局：傾向としてですが、そもそも最初からプールがない学校で、他の小中学校と一緒に1つのプールを運用していたが、運用上困難であることから民間プールの活用のきっかけとなったケースもありますし、老朽化又は破損により、プールの使用が不可能となった時に新たにプールを作るものか民間に委託するものかの選択を行ったとみえています。</p>
3	2	古川委員	<p>○耐用年数30年での民間プール活用との比較について 自校設置のプールの使用年数を耐用年数である30年で計算しなおすと、民間プール活用との金額比較における差は変わってくると思われる。 事務局：40年の使用を想定したのは、明確な根拠をもって40年としたわけではなく、近年の施設の長寿命化のなかで長く使用して行くことを想定し、30年に10年の使用を加えた。プールの自校設置について、30年で金額を計算しなおすと、自校設置に要する経費はその分大きくなり、民間プールの活用との金額比較において異なる結果が出ると思われる。</p>
3	2	溝口委員	<p>○市長部局の他計画の進捗状況について 市長部局及び教育委員会の他計画との整合性について、現時点での公共施設再配置計画や公共施設等総合管理計画の進捗はどの程度か。 事務局：学校における再配置計画については、これから進んでいく計画と理解をしています。 教育長：計画は立てられており、大きな目標としては計画にあるとおりであるが、実施についての方法については、これからであるといえます。その部分についても、ご意見が頂けるとありがたいと思います。</p>

			<p>生涯学習の関係や福祉の関係の機能を学校施設の中で展開していくのかなと考えています。</p> <p>企画財政課長：他の施設については、既に解体したものもあります。学校については、第1期が令和8年までですが、機能として複合化してきましょうというのが、計画の方向性であります。この会の中で複合化であるとか、小中一貫校について話し合われるものと理解しています。</p>
3	2	林委員	<p>○水泳指導の効果と方針について</p> <p>学校外のプールの活用について説明がありました。私どもは幼稚園なので、夏場に園庭に強化樹脂のプールを設置して、水に親しむことを主目的に行っている。</p> <p>小学校のカリキュラムのなかで水泳の授業がどの程度行えているのかを自分の子供をとおしてみると、民間のスイミングスクールと比較したら水浴びレベルの時間しか行えていないように見える。時間の制約もあり、子ども達の個々のスキルの違いもあるため、大変難しいと思われる。</p> <p>小中学校で何のために水泳の授業を行っているのか、正直なところ良く分からない。</p> <p>私の自宅の近くにある高校では、昨年度プールの取り壊しが行われた。コストがとてかかるのだろうと想像する。</p> <p>小中学校の水泳の授業を民間のスイミングスクールに委託したとき、スキルの高い子がより広いプールで専門性の高い教えを受けることができるのだろうが、そもそもの費やされる時間が少ないことから、得られる効果が費やされるコストに比べて厳しいと思われる。新しくプールを作ってもコストがかかり、民間委託をしてもコストがかかりと、大変難しい問題であると思う。</p> <p>スキルのある子をもっと伸ばしていければいいなと思う。</p> <p>私の園での話ですが、今年から体操教室の指導をお願いするところを変えた。以前のところでは、ここまでできたらいい、出来なかったらできないで頑張ればよいというスタンスの指導が行われていた。新しい業者さんは、飛べる子をもっと飛べるようにという方針で指導が行われている。</p> <p>学校の水泳指導もそういったスタンスで行われたらいいなと思う。</p> <p>加藤委員：小学校のカリキュラムの中では、水に親しむだとか遊ぶということが書かれており、その後、徐々にクロールだとか泳ぎ方について進めていく形である。個々の児童の能力差によるところは大きく、既にスイミングスクールで習っていることそうでない子の差は大きいと言える。</p> <p>小学校の公教育の観点から、泳げる子でも、最初の水に顔をつけるところから始めなくてはならない現状もある。</p> <p>教育長：特に小中学校では、生涯にわたって行っていくいろんなスポーツの基礎に親しむことを目標としている。個人ごとに得意なスポーツもあれば、不得意なスポーツもあるだろうが、不得意なスポーツについてもできるだけ基礎的なところまでは習得できるようにしてあげるという目標もある。学習指導要領のなかで、選択で良いスポーツと必ず行わなければならないスポーツとがある。</p> <p>水泳についてはコロナ禍の影響でできていないことが心配で、水泳授業ができないことで泳げない子が増えていることが気掛かりである。水泳については、どれだけ水に親しむか、最低限でも25メートルは誰でも泳げるようにするということが目標になっている。あま市は水郷地帯でもありますし、いざ災害の危機的状況となった時に水の事故を少しでも減らしたいという意図もある。地域の方で、コロナ禍ではあるが、水泳の授業を無くさないでほしいという意見をもらったこともある。</p>
3	2	岩井委員	<p>○子ども達はプールの活動が大好き</p> <p>資料を見て民間のプールをこんなにたくさんの自治体で利用しているのだと初めて知って驚いた。</p>

		<p>保育園では、プールは小さなものですが全園にあって利用している。今年度は人数を減らして密にならないようにプールの活動を行った。プール遊びは子ども達はとても大好きな活動なので、今後も続けていければと思っています。</p> <p>保育園児が小学校に上がるに際して、スムーズに移行して行けるように意識して行こうと改めて考えました。</p>
--	--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

テーマ ①②③	有識者 岐阜聖徳学園大学准教授 山田 貞二 委員長	
回次	令和4年6月28日(水) 第3回あま市小中学校あり方検討委員会	
テーマ	①小規模校と大規模校 ②小中一貫校について	③施設等の共有化・複合化
概要	<p>○複数小中学校を統合し小中一貫校とすることは可能か。</p> <p>○人口密集かつ増加傾向地域と人口過疎かつ減少傾向とあるなか、小学校及び中学校の配置は適当か。学級数の過大な学校と過小な学校とがあるが、小学校及び中学校の規模は適当か。</p>	<p>○プール、体育館、運動場、武道場、校舎等の施設・設備等の複数小中学校による共有化は可能か。</p> <p>○社会教育、図書館、社会体育、子育て支援等の他法他施策による余裕教室等の利用により、学校施設を複合的に利用することは可能か。</p>
賛否	賛成 ・ 反対	賛成 ・ 反対
期待すること	<p>○小中一貫から義務教育学校の方向へ進むべきであると考え。</p> <p>○海部地域では飛島村、石川県では珠洲市に義務教育学校があるが、珠洲市では義務教育学校になっても、1クラス10人しかない。特色としては、地域と一体化する。地域の人にどんどん入っていただいている。岐阜の白川郷学園では、ICTを活用している。飛島学園は授業にとっても力を入れている。いずれも魅力ある特色がある。</p> <p>○教育長は先ほど日本一の学校を目指したいとおっしゃったが、義務教育学校により特色ある学校づくりができていくのではないか。</p> <p>○校長が一人になる事が大きい。校長が一人で9年間を見通した学校経営をすることは大きなメリットである。</p>	<p>○共有化、複合化は進める必要がある。</p> <p>○地域との連携、活性化は、学校運営協議会とコーディネーターさんが中心となって進めていくべき。コミュニティスクールのための部屋があると良い。</p> <p>○子育てサークルが学校の複合化で入っているケースもある。</p> <p>○施設の複合化として児童クラブが校内にあれば、効率が良い。</p> <p>○夏休みになると、校舎はまるっと空いているので、その間だけでも学習支援などに活用できると良いのではないか。保護者の負担軽減にもつながる。</p>
懸念すること	<p>○初期設備投資をどれだけ出せるのか、運営費をどの程度縮減して行けるのかを精査する必要がある。</p> <p>○遠くから通ってくる子は、家に帰ってから遊びに行けないという事例もあった。</p>	<p>○行政にお願いするばかりではなく、学校を共有化、複合化に当たっては、そのための体制をとっていく必要がある。</p>
課題	<p>○最終的に義務教育学校として特色ある学校づくりを行っていくまでに、非常に時間がかかる。多くは、小中一貫校から義務教育学校へ徐々に移行している。</p> <p>○徐々に子ども達も変化に慣れていく。急な変化には子供たちが慣れていけない。子ども達がメリットを感じられるか検証しながら進める必要がある。</p> <p>○どういうスタイルで授業をするか、施設をどのように使うかが課題。</p> <p>○ICTを活用して、遠隔授業を行うなど義務教育学校へ移行するまでの交流の助けとなるだろう。</p> <p>○児童クラブを学校の中に作るなどの工夫が必要である</p>	<p>○セキュリティも考えながら、進めて行ってほしい。</p> <p>○施設の共有化では、移動時間が大きな問題である。</p> <p>○プールの利用については、コロナ禍もあり使用頻度が下がってきているところがあるので、メスを入れていくところかと考える。</p>
その他	○平野部での義務教育学校はまれ。	

テーマ ①②③	市民枠 あま市まち・ひと・しごと創生総合戦略委員会委員 小林 優太 副委員長(当日欠席)	
回次	令和4年6月28日(水)第3回あま市小中学校あり方検討委員会	
テーマ	①小規模校と大規模校 ②小中一貫校について	③施設等の共有化・複合化
概要	<p>○複数小中学校を統合し小中一貫校とすることは可能か。</p> <p>○人口密集かつ増加傾向地域と人口過疎かつ減少傾向とあるなか、小学校及び中学校の配置は適当か。学級数の過大な学校と過小な学校とがあるが、小学校及び中学校の規模は適当か。</p>	<p>○プール、体育館、運動場、武道場、校舎等の施設・設備等の複数小中学校による共有化は可能か。</p> <p>○社会教育、図書館、社会体育、子育て支援等の他法他施策による余裕教室等の利用により、学校施設を複合的に利用することは可能か。</p>
賛否	<input checked="" type="checkbox"/> 賛成 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 反対	<input checked="" type="checkbox"/> 賛成 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 反対
期待すること	<p>○将来的な人口動態予測、現在の公共施設の管理計画も踏まえながら、適正な規模での学校運営ができるよう統合、中小一貫設立の検討をしていただきたい。</p> <p>○小中一貫校は、児童生徒の成長を長期的な目で見守ることができるとともに、それゆえにできる教育実践の可能性も広がると思います。メリット、デメリットを忌憚なく論じ、検討できる環境を整えていただきたいです。</p>	○制度的、財政的に共有、複合化が可能であるならば、取りうる策として柔軟に可能性を模索するのが良いと思います。
懸念すること	○財政面も踏まえた現在の実現可能性はいかほどのものかをリアルに知りたいです。	○前回プールでお示しいただいたような予算感も大切ですが、施設共有、学外施設の利用となると、学校ごとに配慮すべきこと、児童生徒の負担となることが出てくると思います。その辺りを丁寧に検討した上での体制の整備ができればと思います。
課題		
その他		○学校規模、現状の施設の状況によって各校の課題感は異なるかと思います。現場のリアルな声を聞いた上で、課題解決に資する方策をご検討いただきたいです。

テーマ ①②③	有識者 元校長 溝口 鉦 委員	
回次	令和4年6月28日(水) 第3回あま市小中学校あり方検討委員会	
テーマ	①小規模校と大規模校 ②小中一貫校について	③施設等の共有化・複合化
概要	○複数小中学校を統合し小中一貫校とすることは可能か。 ○人口密集かつ増加傾向地域と人口過疎かつ減少傾向とあるなか、小学校及び中学校の配置は適当か。学級数の過大な学校と過小な学校とがあるが、小学校及び中学校の規模は適当か。	○プール、体育館、運動場、武道場、校舎等の施設・設備等の複数小中学校による共有化は可能か。 ○社会教育、図書館、社会体育、子育て支援等の他法他施策による余裕教室等の利用により、学校施設を複合的に利用することは可能か。
賛否	<input checked="" type="checkbox"/> 賛成 (条件付) ・ <input checked="" type="checkbox"/> 反対	<input checked="" type="checkbox"/> 賛成 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 反対
期待すること	○小中一貫校に期待することは多々ある。	○施設の複合化を進めていく必要はあると考える。とても大事なことである。
懸念すること	○地域の方々がどう思っているのかということに十分配慮しながら進めて行かなくてはならないと考える。 ○地域の実情に合わせた形にしなければならない。飛島村では上手くいっていたものでも、あま市では異なる可能性もある。	○学校施設の目的外使用について、社会教育のための施設利用は、学校を開放して市町のスポーツクラブ等がグラウンドなどを利用する。その時に駐車場へ置いてある自動車の置き方が乱暴であるケースがあった。また、学校敷地内で喫煙していた利用者もいて気になった。節度ある利用をお願いしたい。
課題	○地域の方々の意見を十分に聞く必要がある。 ○飛島村とあま市の地域の実情の違いに十分考慮して進める必要がある。	○今後、部活動の在り方も変わってくるみこみであるため、スポーツ団体の利用も増えてくる見込みである。学校施設にふさわしくない使用方法をする団体へはスポーツ課を通じて、その都度当該団体へは注意をしているし、今後もしていかなくてはならない。
その他	○最初から義務教育学校として始めるものか、小学校・中学校の併設型から始めるものかはどちらが良いかは分からない。	

テーマ ①②③	校長 市内小学校校長代表 宝小校長 加藤 万佐子 委員	
回次	令和4年6月28日(水) 第3回あま市小中学校あり方検討委員会	
テーマ	①小規模校と大規模校 ②小中一貫校について	③施設等の共有化・複合化
概要	○複数小中学校を統合し小中一貫校とすることは可能か。 ○人口密集かつ増加傾向地域と人口過疎かつ減少傾向とあるなか、小学校及び中学校の配置は適当か。学級数の過大な学校と過小な学校とがあるが、小学校及び中学校の規模は適当か。	○プール、体育館、運動場、武道場、校舎等の施設・設備等の複数小中学校による共有化は可能か。 ○社会教育、図書館、社会体育、子育て支援等の他法他施策による余裕教室等の利用により、学校施設を複合的に利用することは可能か。
賛否	<input checked="" type="checkbox"/> 賛成 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 反対	<input checked="" type="checkbox"/> 賛成 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 反対
期待すること	○大規模校では小規模校と比べて子どもたちは多くの児童のなかでもまれて切磋琢磨し、人間関係にこじれが生じても、学年ごとでリセットできる。 ○学年主任を中心に学年でチームを組んで分断しながら様々な課題に対処できる。 ○小規模校の良さもあるが、学年ごとに2～3クラスの規模が一番適正ではないかなと思う。 ○小学校での教科担任制も中学校の先生の力を借りて実施していける。小学校からの学力アップが期待できる。 ○あま市としての魅力とすることができ、よりよい教育を求めて人が集まる要因とすることができる。	○共有化について、管理コストの削減という面ではメリットがあると思う。 ○複合化について、本校では児童クラブが複合化で設置されているが、児童は下校してそのまま同一施設内の児童クラブに行けることは、保護者にとっても教職員にとっても安心である。 ○図書室を市の図書館の分館のような運営をしていただければ、司書も来てもらえるし、蔵書も全体の中で効率化し、一定期間で更新したりもしやすいのではないかな。 ○校庭やプールを一般に開放して使っていただければ、空き時間の有効活用となる。
懸念すること	○七宝小から宝小、宝小から秋竹小と分離新設からかなり経過し、親子三代宝小という方もいる。学校運営にもとても協力していただいて、心強いところであるが、それだけ学校に思い入れが強いということでもある。そういった感情についても配慮する必要があると考える。発展的であり未来的な学校のかたちということを説明していく必要があると考える。	○複数校でのプールの共有化をした場合、移動時間が必要となる。自身の子供時代に通った小学校はプールが無く、近くの学校へ借りに言っていたのだが、30分ほどかけてクタクタになりながら歩いて行って、貸してくれている小学校の児童から貧乏学校と揶揄されながら利用した記憶がある。往復1時間ほどかかって、ほとんど半日がかりであった。
課題	○保護者や地域の方々の意見や感情に配慮する必要がある。 ○小学校と中学校では施設面で成長に合わせた違いがある。階段・黒板の高さなど。 ○小規模校では、先生も子ども達もお互いのことを良く知っている状態が作れる。人間関係もとても濃厚で、家庭的な雰囲気。学級運営を担任一人でやっけていて大変ではあるが、全職員が皆で育てるという意識で取り組むことができる。人間関係にこじれが生じたときは、リセットできない。	○余裕教室がない。コロナ禍で児童を分けて給食を食べさせたいと思ったが、そのため教室は確保できなかった。 ○一般開放する場合は、児童の在校時間には難しいと考えている。 ○一般開放する場合の利用者のマナーの問題や、戸締りなどの問題や設備破損時に教員の負担増にならないか心配。
その他		○北名古屋市の事例で、学校運営協議会が盛んで、学校運営協議会の構成員が学校に常駐する部屋があって、依頼事項があると即時答えてくれる環境があると聞いた。

テーマ ①②③	校長 市内中学校 校長代表 甚南中校長 安江 利成 委員	
回次	令和4年6月28日(水)第3回あま市小中学校あり方検討委員会	
テーマ	①小規模校と大規模校 ②小中一貫校について	③施設等の共有化・複合化
概要	<p>○複数小中学校を統合し小中一貫校とすることは可能か。</p> <p>○人口密集かつ増加傾向地域と人口過疎かつ減少傾向とあるなか、小学校及び中学校の配置は適当か。学級数の過大な学校と過小な学校とがあるが、小学校及び中学校の規模は適当か。</p>	<p>○プール、体育館、運動場、武道場、校舎等の施設・設備等の複数小中学校による共有化は可能か。</p> <p>○社会教育、図書館、社会体育、子育て支援等の他法他施策による余裕教室等の利用により、学校施設を複合的に利用することは可能か。</p>
賛否	賛成 ・ 反対	賛成 ・ 反対
期待すること	<p>○教育長がおっしゃった、日本一の学校ができるのではないかとという言葉に期待したい。</p> <p>○教科の連携が深まりやすくなる。中学校の社会の先生が小学校に教えに行く、あるいは英語の先生が行くといったことが可能になる。中学校の先生から見ても、小学校ではここまで学習してきているのだということが分かりやすい。中学校の職員が小学校に行き、児童の様子や状況を見たりは年度末あたりに行っているが、年間を通して可能となる。</p> <p>○中1ギャップの解消につながる。</p> <p>○教職員間のフォローを行いやすい。特に小規模校では全教職員が教室に行き、職員室が空になる事もよくある。何らかの事情で長期の休みを取るようになった場合は、役職者が代わりに授業を行うなどの対応が必要となる。小中両方の教職員がいれば、それぞれフォローを行いやすい。</p> <p>○不測の事態が起きたときに、小中両方の先生がいた方が、素早い対応が可能となる。多くの目で児童生徒を見守れる。</p>	<p>○プールについては、維持費とスポーツ施設に委託する費用を比較すると、インストラクターの費用を合わせても、同じくらいの費用ですむと聞いたことがある。他市の事例を聞くと、専門のインストラクターの指導を受けることによって、より教育効果の高い水泳指導ができているとのこと。私の前任校のすぐ近くの学校では、学校のプールへインストラクターが来て、夏休み中や短縮期間に泳げない児童を指導していると聞いた。専門のインストラクターだけあって、泳げない児童を集めて指導していて、ものの数日で泳げるようになるところまで持っていく様子に感心したと聞いた。校外へ持ち出すことによる時間的コスト増もあるが、専門のインストラクターによる指導はメリットがあると思う。</p> <p>○余裕教室については、本校は全くなく、むしろ教室が欲しいくらいだが、余裕教室がある学校では、それ用の先生が必要になってくるが、通級指導教室のようなものを設置できないかと思う。</p>
懸念すること		<p>○プール、体育館、運動場等を複数小中学校で共有することについて、現場での現状を見ると困難であると言える。時間割を作る際に、雨などで運動場が使えなくなって、体育館や武道場を使うことを考えている。あるいは、理科室などの特別教室についても重複しないように調整して時間割をつくる。同じ学校内でだけでも調整や変更が必要な状況である。複数校で調整することは、難しい状況である。</p>
課題		<p>○一つの施設に複数校が行くことになると、夏の期間に終われず、秋までかけて日程調整することになる。</p>
その他	小中連携型から始めると良いと考える。	

テーマ ①②③	幼・保枠 あま市保育園保育士長 溝口 由紀江 委員	
回次	令和4年6月28日（水）第3回あま市小中学校あり方検討委員会	
テーマ	①小規模校と大規模校 ②小中一貫校について	③施設等の共有化・複合化
概要	<p>○複数小中学校を統合し小中一貫校とすることは可能か。</p> <p>○人口密集かつ増加傾向地域と人口過疎かつ減少傾向とあるなか、小学校及び中学校の配置は適当か。学級数の過大な学校と過小な学校とがあるが、小学校及び中学校の規模は適当か。</p>	<p>○プール、体育館、運動場、武道場、校舎等の施設・設備等の複数小中学校による共有化は可能か。</p> <p>○社会教育、図書館、社会体育、子育て支援等の他法他施策による余裕教室等の利用により、学校施設を複合的に利用することは可能か。</p>
賛否	賛成 ・ 反対	賛成 ・ 反対 分からない
期待すること	<p>○毎年夏に行われる幼保小連絡協議会が開催されるが、保育園と小学校の情報共有と連携を行うことができ、園児が小学校に安心して入学できる助けとなっている。</p> <p>○園児が小学校に見学に行ったり、中学生が保育園に職場体験に来たりと交流が行われている。双方の良い影響を与え合っている。小中一貫教育が子供にとって、良いものとなって欲しい。</p>	
懸念すること		
課題		
その他		○今回からの参加ということもあり、皆さんの意見を聞かせていただいて、勉強させていただきました。

テーマ ①②③	幼・保枠 市内私立幼稚園代表 宝学園（中川幼稚園）理事長 林 弘樹 委員	
回次	令和4年6月28日（水）第3回あま市小中学校あり方検討委員会	
テーマ	①小規模校と大規模校 ②小中一貫校について	③施設等の共有化・複合化
概要	<p>○複数小中学校を統合し小中一貫校とすることは可能か。</p> <p>○人口密集かつ増加傾向地域と人口過疎かつ減少傾向とあるなか、小学校及び中学校の配置は適当か。学級数の過大な学校と過小な学校とがあるが、小学校及び中学校の規模は適当か。</p>	<p>○プール、体育館、運動場、武道場、校舎等の施設・設備等の複数小中学校による共有化は可能か。</p> <p>○社会教育、図書館、社会体育、子育て支援等の他法他施策による余裕教室等の利用により、学校施設を複合的に利用することは可能か。</p>
賛否	賛成 ・ 反対	賛成 ・ 反対
期待すること	<p>○かつて中川幼稚園は、500人を超す、県内で最も大きな幼稚園の一つであった。現在は150～180人ぐらいだが、園児のことを考えると現在の中規模が良いと確信している。大規模すぎると園児と先生の関係も希薄になる。現在の中規模では園児と先生の関係も密にできている。</p> <p>○現在は先生に余裕も生まれて、カリキュラムも非常に充実している。様々な取組をすることも可能となっている。</p> <p>○あま市としての教育の魅力を向上させることができる。私は昭和区に住んでいて、子どもが小学校が入学したときに、同小学校長が、当学区は名古屋市屈指の治安のよいエリアであると説明されており、とても良いところに引っ越してきたなと感慨を持った。あま市がそういう環境になればいいと思う。</p> <p>○以前住んでいたアメリカの州では、小中一貫教育が一般的で、世界でもスタンダードなのではとも思う。そういうシステムを先んじて、あま市が取り組むことで地域の魅力であり特色になるのではないか。</p>	<p>○施設の複合化を考えたときに、施設の増改築は必要となる。あま市に限らず、学校の施設はグレーで汚れていて、見た目がよいとは言えないと思う。外観の塗装ひとつとっても、やり方ではコストをあまりかけずに魅力のあるものにするには可能であると、自身の園の経験から思った。子ども達には楽しく通えるように、子ども達の記憶や心に残る施設であってほしい。自身の園のデザイン案を考えるとときに海外の小学校の塗装デザインを見たりしたが、どこもカラフルで魅力的だった。差し色ひとつでもデザインで違ってくる。ぜひ、今後の外装工事の際には、構造を変えたとお金がかかるがデザインで楽しいものにしてほしい。</p>
懸念すること		○施設の老朽化は、私も幼稚園経営するなかで頭の痛い問題である。
課題		
その他		

テーマ ①②③	保護者枠 保護者代表 前教育委員（保護者） 佐藤 明美 委員	
回次	令和4年6月28日（水）第3回あま市小中学校あり方検討委員会	
テーマ	①小規模校と大規模校 ②小中一貫校について	③施設等の共有化・複合化
概要	<p>○複数小中学校を統合し小中一貫校とすることは可能か。</p> <p>○人口密集かつ増加傾向地域と人口過疎かつ減少傾向とあるなか、小学校及び中学校の配置は適当か。学級数の過大な学校と過小な学校とがあるが、小学校及び中学校の規模は適当か。</p>	<p>○プール、体育館、運動場、武道場、校舎等の施設・設備等の複数小中学校による共有化は可能か。</p> <p>○社会教育、図書館、社会体育、子育て支援等の他法他施策による余裕教室等の利用により、学校施設を複合的に利用することは可能か。</p>
賛否	<p><input type="checkbox"/>賛成</p> <p>・</p> <p><input type="checkbox"/>反対</p> <p>分からない</p>	<p><input type="checkbox"/>賛成</p> <p>・</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>反対</p>
期待すること	<p>○小学校から中学校へ新規一転切り替えることができる、保護者の方も賛同してもらえるような仕組みがあれば、賛成側に考えも向くか。</p>	<p>○施設の複合化については、自身の子が通う小学校にコミュニティルームができ、読み聞かせ等で活用しているのだが、その部屋が出来たことによって、学校へ行くハードルがとても下がったと感じている。子ども達の様子を見ることができ、楽しく活動させていただいている。地域の方々の関心が高まることも期待できると感じる。</p>
懸念すること	<p>○自分も、子ども達も、いわゆる一般的な学制のもとで教育を受けてきたので、小中一貫校については正直、分からない。小中一貫校になることで、子ども達にどのような影響や、効果や、環境の変化があるのか分からない。プラスもマイナスも想像できていない。</p> <p>○人間関係に不安を感じていて小学校に通うことが出来なかった子が、中学校に上がるに際して、リセットされて通うようになれることもあるのではないかとも思う。小中一貫教育で、そういったリセットのチャンスや期待がなくなるのではないか。</p>	<p>○施設の共有化は、授業の時間を考えるとハードルが高いと感じる。</p>
課題	<p>○子ども達が主役である。子どもの視点から、変化がデメリットになってはいけない。</p> <p>○保護者の方の理解を得る必要がある。</p> <p>○地域の方々の理解を得る必要がある。</p> <p>○学校関係者にはわかることも、保護者の方々や、地域の方々には、分からないこともある。上手く理解をしていただけるよう努力が必要である。</p>	
その他	<p>○小規模校と大規模校については、それぞれメリットデメリットを様々説明していただいて、それぞれに一長一短あるように感じている。</p>	

テーマ ①②③	行政 企画財政部 財政課長 古川 式規 委員	
回次	令和4年6月28日(水)第3回あま市小中学校あり方検討委員会	
テーマ	①小規模校と大規模校 ②小中一貫校について	③施設等の共有化・複合化
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○複数小中学校を統合し小中一貫校とすることは可能か。 ○人口密集かつ増加傾向地域と人口過疎かつ減少傾向とあるなか、小学校及び中学校の配置は適当か。学級数の過大な学校と過小な学校とがあるが、小学校及び中学校の規模は適当か。 	<ul style="list-style-type: none"> ○プール、体育館、運動場、武道場、校舎等の施設・設備等の複数小中学校による共有化は可能か。 ○社会教育、図書館、社会体育、子育て支援等の他法他施策による余裕教室等の利用により、学校施設を複合的に利用することは可能か。
賛否	賛成 ・ 反対	賛成 ・ 反対
期待すること	<ul style="list-style-type: none"> ○中1ギャップ、不登校の減少を期待。 ○先進的な取り組みによる、あま市の教育施策の向上に期待。 	<ul style="list-style-type: none"> ○共有化、複合化により、財源の効率化が期待できる。 ○学校の空き教室の利用について、人口減少地域では良く聞かれるものですが、学校が地域活動の場となり、学校区単位でのコミュニティの活性化が期待できると考える。
懸念すること	<ul style="list-style-type: none"> ○教育的な観点から、人間関係が変わらないことから、いじめの継続化、悪化があるのではないかと。(小規模校の単学級では逆に現状で硬直化してしまうとも他から意見あり。) ○通学距離が長くなり、徒歩で通えなくなる児童生徒が出てくるのではないかと。(他地区ではバス通学もある。) ○学校の整理をする場合は、巨額の公費投入を必要とし、既設建物を活用しても大きな投資を必要とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○共有化により、距離がのびることにより児童生徒の移動手段
課題	<ul style="list-style-type: none"> ○場所については、都市計画マスタープランを考慮して人口動向を注視して適切な選択する必要がある。30年後に同じ議論をしてはいけない。 ○魅力に伴って、児童生徒の減少に歯止めをかけられるような、課題解決であるようにしてほしい。 ○小中一貫教育に際して、規模を考慮する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○民活化する際の費用対効果を再度精査する必要があると感じる。 ○共有化、複合化については児童生徒の理解を必要とすると考えます。 ○働く女性が多い社会経済情勢を考えたときに、学校の空き教室を利用した児童クラブの活用は、求められているところであると考える。 ○教職員の理解も必要であると考えます。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○七宝北中学校通学制度を改変して、小学校から通うか否かを選ぶことができる制度としてはどうかと、関連して他から意見が出た。 	

テーマ ①②③	行政 企画財政部 企画政策課長 早川 敬成 委員	
回次	令和4年6月28日（水）第3回あま市小中学校あり方検討委員会	
テーマ	①小規模校と大規模校 ②小中一貫校について	③施設等の共有化・複合化
概要	<p>○複数小中学校を統合し小中一貫校とすることは可能か。</p> <p>○人口密集かつ増加傾向地域と人口過疎かつ減少傾向とあるなか、小学校及び中学校の配置は適当か。学級数の過大な学校と過小な学校とがあるが、小学校及び中学校の規模は適当か。</p>	<p>○プール、体育館、運動場、武道場、校舎等の施設・設備等の複数小中学校による共有化は可能か。</p> <p>○社会教育、図書館、社会体育、子育て支援等の他法他施策による余裕教室等の利用により、学校施設を複合的に利用することは可能か。</p>
賛否	<input checked="" type="checkbox"/> 賛成 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 反対	<input checked="" type="checkbox"/> 賛成 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 反対
期待すること	<p>○小中一貫校による学校の統合により、公共施設の延べ床面積の縮減を図ることができる。維持管理経費や運営費も縮減が期待できる。</p> <p>○教職員の配置についても余裕を持ったものとできるのではないかと期待できる。</p> <p>○学習面の向上を図る。また、中学校への進学に不安を覚える児童の減少が期待できるのではないかと期待する。</p>	<p>○図書館との連携により、調べ学習の幅が広がることを期待できるのではないかと期待する。</p> <p>○余裕教室の活用により、児童クラブ等の利用をすることにより、同一施設内で完結させることが可能となって教育の連続性を増進させることができるのではないかと期待する。</p> <p>○複合化することにより、地域住民や異年齢者との自然な交流が生まれてくるのではないかと期待する。</p> <p>○単体で整備するよりも、複合化させた方が市全体での支出の平準化や削減も期待できる。</p>
懸念すること	○小中一貫校ありきではなく、統合についても考慮に入れて欲しい。	
課題	○公共施設は老朽化が進んできており、総合計画や再配置計画、長寿命化計画のなかでも、大規模な改修を要する時期に来ている。	<p>○施設内で児童生徒と地域住民の動線が交錯することが出てくるが、その際のセキュリティ対策が必要。カギをかけて別々にできるようにしたりする必要があると考える。</p> <p>○教職員の理解を得ることが必要。</p> <p>○複合化した時に、学校と他の利用でそれぞれ音を出す活動があった際に、互いに支障をきたさないように配慮する必要がある。</p>
その他		

テーマ ①②③	行政 行政 福祉部 子育て支援課長 恒川 和宏 委員	
回次	令和4年6月28日(水) 第3回あま市小中学校あり方検討委員会	
テーマ	①小規模校と大規模校 ②小中一貫校について	③施設等の共有化・複合化
概要	<ul style="list-style-type: none"> ○複数小中学校を統合し小中一貫校とすることは可能か。 ○人口密集かつ増加傾向地域と人口過疎かつ減少傾向とあるなか、小学校及び中学校の配置は適当か。学級数の過大な学校と過小な学校とがあるが、小学校及び中学校の規模は適当か。 	<ul style="list-style-type: none"> ○プール、体育館、運動場、武道場、校舎等の施設・設備等の複数小中学校による共有化は可能か。 ○社会教育、図書館、社会体育、子育て支援等の他法他施策による余裕教室等の利用により、学校施設を複合的に利用することは可能か。
賛否	賛成 ・ 反対	賛成 ・ 反対
期待すること	<ul style="list-style-type: none"> ○たくさんあるものが、一つに集約することでコストの削減が期待できる。 ○削減できた予算を子ども達のために使うことができる。 ○自信の子供時代を振り返ると、児童生徒が多くいて、友達がたくさんいた方が良い思い出となっている。 ○児童数が多い方が、競争原理も働きやすいのではないか。 ○頑張っって良いものを作って行けば、市としての魅力の向上につながり、人口減少から増加に転化できないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○複合化することにより、コスト削減効果が期待できる。 ○ひとり親家庭の学習支援でも、生活困窮世帯の学習支援に空き教室があれば、使わせていただきたい。
懸念すること	<ul style="list-style-type: none"> ○住民の方や、子ども達の理解を得られるように時間をかけて説明していく必要があるのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○再配置計画では、多くの児童館が取り壊しとなっているが、現状の学校の空き教室状況のなさを考えたときに、果たして複合化させることが可能なのか、現実的なのかも考えている。 ○保育園でも、遊戯室を一部保育室にしたりと、余裕がない状況があるなか、小学校も同じように、余裕教室が多くある状況ではないのではないかと心配する。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ○小中一貫校の校舎を考えるとときに児童クラブや子供教室を含めた、トータルで考えていただきたい。 ○施設のユニバーサルデザインに考慮して改修、建設をしてほしい。(階段の高さも小学校と中学校で違う。) ○財政的に厳しいおり、さらなる資金の投入は市民の理解を得られるよう説明を。 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童クラブとして活用させていただける部屋がある場合は拡充できればしていきたい。 ○学校の使用状況によって、年度により使える部屋を変える必要がある。 ○子供教室等で体育館を利用させていただいている状況があるが、防犯面はしっかりとやっていかななくてはいけないと考えている。
その他		

テーマ4 これからの学校・学校と学校・学校と地域のあり方

テーマ	回次	委員	委員意見・質問
4	1	山田委員長	<p>○地域と学校をつなぐコーディネーターについて 学校運営協議会について、大事なのは地域と学校をつなぐコーディネーターであると思います。そのあたり、現状と、どのように機能しているものかということについて教えてください。←事務局：学校運営協議会のコーディネーターについては、お手元資料の小中学校のあり方④の3ページ中段に地域学校協働本部という部分に記載があります。</p> <p>具体的に説明させていただくと、あま市の地域学校協働本部のコーディネーターは3人います。この3人が地域ごとに割り振りを行っていきまして、お手元資料のあま市小中学校の現状と予測の1ページにあま市内の小中学校のうち、①七宝小学校から④秋竹小学校でひとり、⑤美和小学校から⑧美和東小学校まででひとり、残り⑨甚目寺小学校から⑫甚目寺西小学校まででひとりに担当していただいています。</p> <p>今、もう一人四人目のコーディネーターをお願いして、中学校の担当を兼務のみではないようにする計画を立てています。</p> <p>なお、このコーディネーターは、各学校から要望をお聞きして、登録している各ボランティアにお繋ぎしています。この登録しているボランティアは、現在220人を少し超えています。しかし、コロナ禍であることもあり、活動があまりできていない現状もあります。そういった点では、220人のボランティアの方々全員フルに活用できているわけではない状況があります。</p>
4	1	小林副委員長	<p>○学校の中に外部の専門性をいかにして入れるか ICTの件でもありますが、これからの学校の件でもあるのですが、学校の先生にあれも教えてね、これも教えてねと増えて行っているのだなという印象を受けておりまして、そんな中でボランティアの方との連携もさることながら、専門性を学校の中に外からいかにして入れていくのかということがすごく大事なのだなと感じました。</p>
4	1	岩井委員	<p>○小1プロブレムと子供たちが生き生きと毎日生活できるような小中学校の在り方について 毎年、保育園からたくさんの子供たちが小学校へ入学しています。先ほど、中1ギャップというお話がありましたが、小学校入学に際しても、小1プロブレムと言われる問題があります。あま市においては、この小1プロブレムに対処するため、毎年夏ごろに幼保小連絡協議会を開催し、子供たちがスムーズに小学校に入学できるように幼稚園保育園と小学校が情報連携をとるための会を行っています。この取り組みは、子供たちがスムーズに小学校へ入学するための助けになっており、とても役立っていると考えています。</p> <p>本当にたくさん問題があると思うのですが、保育園もそうですが、小中学校は子供たちが主役であるということを忘れてはいけません。小中学校は、子供たちが勉強しやすい場であって欲しいと思います。また、子供たちが生き生きと毎日生活できるような小中学校のあり方について、今後検討が出来るの良いなと思います。</p>
4	1	山田委員長	<p>○学校運営協議会の働きがもっとも重要で、地域コーディネーターがキーパーソンになる 私は、学校運営協議会の働きがもっとも重要と考えます。学校間の連携も地域との連携もこの協議会の活動にかかっているといても過言ではないと考えています。カギになるのは、地域コーディネーターです。可能であれば、各校に1名は必要と思います。この方をキーパーソンとして学校と地域が実質的につながっていきます。一貫校や義務教育学校ができたときには、特に重要な働きをされると思います。地域の学校に対する考えも大きく変わることが予想されます。</p>

4	1	小林副委員長	<p>○長期的な視点で話す部分と、短期的に改善が求められる点の整理と意見交換から始め、できることから実践に移しては</p> <p>③④については、長期的な視点で話す部分と、短期的に改善が求められる点や地域との関わりなど実践に移していける点など短期的な視点で話せる部分があると思います。ゆえに、長期 or 短期の論点の整理と意見交換をしながら、できることは実践に移していくという考え方で⑤⑥に続けて取り上げてはいかがでしょうか。</p>
4	1	溝口委員	<p>○地域コミュニティの活動をもっと重視してほしい</p> <p>教育相談センターはその設置意義などから考え、老朽化問題は早急に解決すべきと思う。「あま市公共施設等総合管理計画」の、今後の方針の中で、「学校が地域コミュニティの核となるような、様々な活用方法の検討を行います。」と記されているが、地域住民としてはこのことが最も関心の強い事柄である。地域コミュニティの活動をもっと重視してほしい。むしろ教育以外の分野で、行政が率先してこのことに関して住民に心を向けてほしい。</p>
4	1	溝口委員	<p>○お互いが顔の見える関係作りに努力すべきで、学校が本音で話し合える関係作りに努力すべき</p> <p>学校と地域との連携について、学校運営協議会（コミュニティスクール）、地域学校協働本部について、詳しくその理念などが述べられているが、現実はどうか。</p> <p>地域の住民は子どもたちのために努力を惜しまないと思う。お互いが顔の見える関係作りに努力すべきである。地域に愛される学校を目指すならば、学校が本音で話し合える姿勢が必要で、その実現に向けて実践すべき。教育委員会からの文書で、「・・・共に考え、共に議論し、そのビジョンを目指して・・・」などとあるが、「支援」から「連携・協働」に向けて課題は多いが目指すべき事である。将来的には余裕教室等が地域コミュニティの核となり、運営協議会等の拠点になる事が理想である。改めて、学校運営協議会について適切な助言をいただきたい。</p>
4	1	溝口委員	<p>○地域のコミュニティづくりの推進が大切である</p> <p>学校間交流は、安易に交流という言葉に捉われないで、その是非について十分検討すべきである。小中幼保の交流・連携、異学年交流など重視すべき事項がある。</p> <p>何よりも地域のコミュニティづくりの推進が大切であると思う。</p>
4	1	溝口委員	<p>○教育相談センターの拡充とスクールソーシャルワーカーの配置を</p> <p>教育相談センターは、様々な問題を抱えた子どもたちを支援するための重要な機関であるので、相談員を増やすとともに、スクールソーシャルワーカーの活用も必要である。複雑多岐にわたる環境の子供たちに適切な組織的支援体制の構築が望まれる。メディア対応にも関わってくる。地域の教育、特に現場に精通した人を教育センター以外の相談員にも派遣してほしい。</p>
4	1	溝口委員	<p>○ひとり親家庭への支援、外国籍の子どもの日本語教育の必要性</p> <p>ひとり親家庭への支援、外国籍の子どもの日本語教育の必要性もクローズアップされておりきめ細やかな計画が必要であると思う。特に、外国籍人口の増加傾向にあるあま市には重要。</p> <p>ただ、この件は教育行政だけに係る問題ではないと思う。</p>
4	1	加藤委員	<p>○教職員だけの力ではできないこともある</p> <p>あり方⑥働く場としての学校とも関連</p> <p>教育や環境整備等の中には、教職員だけの力ではできないこともあるので、家庭や地域の方のお力をいただけることは、とても助かる。子ども達も、専門的なことを教えていただいたり、体験的なことを学習したりしているときの目は輝き、学びに対してとても積極的である。</p>

4	1	安江委員	<p>○特別支援教育における学校のあり方について 特別支援教育における学校の在り方について。特別支援教育における学校、行政の在り方を今以上に模索していきたい。あま市は発達特性に関する対応について、先進的に様々な取組をしていると思う。その素地が揃っているの、さらに充実させていけるとよいと思う。社会的にも発達特性に関して、関心が高まっており、特性に応じた対応の必要性が叫ばれている。このことについては、行政と学校、教員の連携をより深めていかなければいけないと感じる。そして、今以上に教員の特別支援教育に関する力量向上を目指すとともに、支援員の拡充、ビリーブのような教室増設の必要性を感じる。</p>
4	2	小林副委員長	<p>○教育立市プランの着実な進捗を ハード面だけでなく、ソフト面についても教育立市プランに基づいて着実に進めていただきたい。 地域社会との連携など、これからの学校教育では重要となると考えられます。やれるといいよね、ではなく、どうやったら実施して行けるのかと考えながら進めていただきたい。</p>
4	2	安江委員	<p>○児童生徒の個々の特性に合わせた育みについて 発達特性を抱えた子どもをどのように育んでいくのかということが、今後ますます重要となってくる。発達特性を持っていない子どもについても、個々の特性を子ども達はもっているの、そういった特性をいかにして伸ばし、育んでいくのかは、教員の資質が問われるところであると考えている。スクールサポーターや適応指導教室と連携しながら、包括的に育んでいく必要がある。</p>

テーマ5 ICT利活用における学校のあり方

テーマ	回次	委員	委員意見・質問
5	1	古川委員	<p>○ICTを活用した授業の推進をスピード感をもって ICTの関係です。予算の査定では何度も議論させていただきました。教員のICT支援については、教員のICT活用能力を段階を踏まえながら進めて行こうと考えているとお聞きしています。しかし、タブレット端末はせいぜい5年から6年程度しか使用できないものであろうと想像するところです。おそらく、その後には更新が必要となると思われます。タブレット端末の導入には約7億円程度かかりました。そうすると、5年から6年経過したところで再度約7億円の予算を必要とするとなると、相当な財政負担が必要となります。そういった場合、タブレット端末を使用したICT利活用の効果がどの程度あるのかが問われるのが、5年後6年度にやってきます。その際、タブレット端末を使用した、いわゆるICTを活用した授業について、ぜひともスピード感をもって進めていく必要があるのではないかと考えています。グランドデザインについて、しっかりと考えて行く必要があると考えます。 ←事務局：ICTの関係です。昨年度と今年度にわたって、学校の先生方が集まり、課題検討委員会を設けました。課題検討委員会では、どのように学校の中でICT機器を活用した授業を行っていくのかということをお話ししました。例えば、パソコン教室のあり方ですとか、実際に各学校で取り組んでみた授業の方法論の共有であるとかです。 そういった知識を共有しながら、教員のタブレット端末を利用した授業について検討しているのですが、今まで国内で児童生徒全員がタブレット機器をもって授業を受けるということが公立学校ではなかったため、そういったノウハウが未だ蓄積されていません。どうしても、全国の学校で手探りのなかでタブレット端末を利用しています。 来年度についても、引き続き課題検討委員会を開催し、授業におけるICT利活用を話し合っていく予定です。 教科書会社の方や大学の先生方と話をしている中でも、更新の問題が話題にあがります。機器等は耐用年数があって何年か経過し</p>

			<p>た後は買い換えなければならないということがあります。しかし、更新費用約7億円を国や県からの補助がないなか実施することは困難であると考えられます。将来的には、タブレット端末は児童生徒の利用する文房具として、ランドセルや筆箱、鉛筆と同じように世の中全体が家庭への負担をしていただく方向になるのではないかとされています。</p> <p>しかし、児童生徒一人一人が異なった機種を用意すると、授業の中で利用することが難しいので、同じ機種を用意するにあたり、修学旅行や宿泊行事の積み立てと同じように子供たちがある程度、ICT機器の購入費用を積み立てて自己負担、受益者負担を求めている方向となるのではないかと考えています。</p> <p>ある私立学校では、月々三千元ずつ積み立てて5年間ほどかけて学校でセキュリティも確保した学校仕様のノートパソコンを購入して入れ替えるということをしていると聞きます。</p> <p>そういったことも必要になってくるのかなど、私は個人的には思っています。</p> <p>国は完全に五年後には個人負担になることを念頭に発言しています。</p> <p>当然、市としてどのような補助をしていくのかを考えていかななくてはならないと思います。国からは具体的な話は出てきていないです。当然5年、6年たてば買い替えなくてはなりません。年度ごとに6年生が卒業して行けば、新1年生が入ってくるわけですが、お金は発生してきます。</p> <p>まだまだ課題はたくさんありますが、まずは、先生方の力量アップを現在の状況ではしていかななくてはならないと考えています。</p> <p>本当にすごい投資をしていただいています。先生方には自分自身の力量アップをしていただいて、子供たちにタブレット端末を使って、どんな力をつけさせるのかということを確認していかななくてはならないと思います。</p> <p>課題検討委員会でも、教員の力量について段階的なタブレット活用のイメージとしてステージ1からステージ4というような形で、段階的にステップアップしていくことを検討していただいています。</p> <p>課題検討委員会は、継続的にあと2年くらいは続けていただく必要があると考えています。</p> <p>教育委員会としては、リーダーシップを発揮して教員の指導力アップを図っていきます。</p>
5	1	小林副委員長	<p>○ICTの活用推進にファシリテーションのような他の専門性の活用を図ると良い</p> <p>ICTについても、学校だけでなく一般社会でもここ2年くらいでオンラインで人と何かコミュニケーションをとるという機会が増えてきています。対面だからよくて、オンラインだからダメとかではなく、対面には対面の、オンラインにはオンラインのそれぞれメリットだとかコミュニケーションのやり方や作法があると思います。</p> <p>そういうのは、学校の現場だけでなく、例えばファシリテーションを専門とされている方だとか、ワークショップをしたりしている方だとかも持っていると思います。学校の中の話だけでなく、視野を広げて、様々な分野での知見も取り入れていった方が良いのではないかと思います。</p>
5	1	安江委員	<p>○スクールサポーター、ICT教員研修に感謝</p> <p>あま市はスクールサポーターが充実していますし、ICTの導入も早かったと思います。ICTの力量向上の教員研修も、他の市町よりも充実した形でできていて、本校でもそのおかげでICT機器をどんどん使っている状況があります。現場の教育に対して一生懸命取り組んでいただいて、大変ありがたいと思っています。</p>

5	1	佐藤委員	<p>○タブレット端末の学習面での効果に注視 ICTについては、実際にタブレット導入までのところは見させてもらっていましたが、子供たちがどのような状況で使用し、学習面でどのような効果があったのかということも興味深く見させていただいています。</p>
5	1	山田委員長	<p>○学校生活の中でICTを使うことについて ICTについてですが、文房具の様に使いなさいと文部科学省も言っています。そうすると、子供たちは朝登校したら、当たり前スイッチを入れて使い始めるようになる。授業だけで使うのではなく、私はステップ0と言っていますが、学校生活の中でICTを使う。このステップ0が大切で、生活の場面でICTを使っていくと、子供たちは当たり前に見えるようになっていって、先生たちも使えるようになっていく。例えば、体温を測ってきて先生に報告するにあたって、タブレットを使って報告する。あるいは、一日の感想をタブレットを使って記録する。それから、連絡帳もタブレットで全部まかなう。タブレットをいろいろ使っていく方策はたくさんあるので、そこから慣れて行けば使用頻度が上がって、授業の中でも自然と使えるようになってくるであろうと思われる。</p>
5	1	山田委員長	<p>○学校と地域との連携にICTを活用する また、地域との関連でも、学校でやっていることをオンラインで配信するであるとか、子供たちの作品発表をオンラインで紹介するであるとか、いろんな活用方法があります。これらは、地域との繋がりに役立つと思います。関連してくる内容として、そういった議論もできると良いかなと思っています。</p>
5	1	山田委員長	<p>○まずは0ステップの利用から まずは0ステップでの活用。文房具として使用するためには、生活の中で使いこなしていくことからスタートすると授業の中での活用が極めて早くなります。教員も日常的に使用することで、ICTに対する苦手意識が払しょくされていきます。そして、授業内では、何ができるのかを、校内にチームを作って研究することがICT活用の近道であると考えています。校内から湧き出たアイデアは、あっという間に浸透していきます。講師による研修と併せて行いたいですね。</p>
5	1	溝口委員	<p>○ICT利活用の課題は極めて重要 ICT利活用の教育は今後極めて重要な位置づけになる。課題は列記されている通りだと思う。端末の家庭への持ち帰りはいつ頃なのか。子どもたちが、立ち止まって考える習慣がなくなってしまうようにしたい。</p>
5	1	加藤委員	<p>○10年後のビジョンを予測するのが難しい 今、差し迫っている問題であるが、ICTを取り巻く環境の変化が激しいので、10年後のビジョンを予測するのがなかなか難しい。</p>
5	1	安江委員	<p>○情報モラルの意識の充実とグランドデザインの設定 積極的に活用し始めている中で、有効活用することにより、たいへん効果があると実感する。今後に向けて課題とされることとしては、情報モラルの意識の充実と校内のICT機器構成のグランドデザインかと思われる。まずは、教員の中に、これらの意識をきちんと定着させ、子どもたちに明示できるようにしていく必要がある。</p>
5	2	安江委員	<p>○ICT利用教育の知識や指導力の向上について ICT利用教育の知識や指導力の向上について、今後ますます教員の能力向上を図る必要があると考える。</p>

テーマ6 教職員の働く場としての学校のあり方

テーマ	回次	委員	委員意見・質問
6	1	古川委員	<p>○スクールサポーター配置事業は教員の働き方改革に寄与しているか 教員の働き方改革に関してです。あま市ではスクールサポーター配置事業として年間9,500万円程度の経費で補助員を配置して</p>

			<p>います。近隣市町と比較しても手厚い制度であると認識しています。教員の働き方改革にスクールサポーター配置事業は寄与しているのかどうかをお聞きしたいです。</p> <p>←事務局：スクールサポーターが教員の働き方改革に寄与しているかという点です。本市は、たくさんの予算をスクールサポーターに割いていただいていると認識しています。他市町と比較しても手厚いものであると理解し、感謝しているところです。</p> <p>心や体に様々な障害等を持って支援を必要とする子供たちが、インクルーシブ教育という形で特別支援学級だけでなく、普通学級のなかでもたくさんいます。あるいは、特別支援学級の児童生徒も教科によっては、学習活動に応じて交流学級として、普通学級のなかで集団と一緒に授業を受けることがあり、支援を必要とします。それらの支援をスクールサポーターの方々に担っていただいています。</p> <p>スクールサポーターの方々がいることで、教員の負担の軽減に確実につながっていると思います。</p> <p>他にも、ネイティブの発音ができるALTの先生の配置によって、子供たちがネイティブの発音による英語の学習ができるようになったということであったり、図書支援員の方が配置されたことにより、教員のみでは行き届かなかった図書室の管理がなされ、図書室の利用が格段にしやすくなっていることであったり、外国人の児童生徒への初期の日本語指導を語学支援員にさせていただいたりしています。これらスクールサポーターの支援がなければ、教員だけではとても学校運営が立ちゆかないと言えます。</p> <p>学校に期待される役割が多様化しているいま、スクールサポーターの方々の支援を受けてなお、現場の先生方は多忙化及び要求される機能の多様化が進んでいます。手厚く配置していただいているものの、現場の先生方の声としては、もっと多くのスクールサポーターの支援を欲しているというのが実状です。</p> <p>特に特別支援関係では、限られたスクールサポーターの人数及び時間のなかで優先順位を付けて支援をしているところであり、支援を必要とする児童生徒は現在支援をすることができている人数以上にいます。</p> <p>教員の働き方改革には、大きく寄与していただいていると言えます。</p>
6	1	安江委員	<p>○部活動の今後の展開について</p> <p>さしせまった問題として、部活動がどのように今後どのように展開していくのかという問題があります。先ほど、部活動とは直接関係ないかもしれませんが、登録ボランティア220人という話がありました。そういう形で、しっかり進んでいきそうだなという感触を得ています。</p> <p>校長会にも、この6つのテーマについて提示しながら、様々な意見を聴取しながら次の会にですとか、今後の会に出していけたらと思います。</p>
6	1	恒川委員	<p>○部活動のクラブチームへの移行について</p> <p>これは子育て支援課長としてではなく、私はクラブチームの役員をしていますので、その関係からの意見です。クラブチームの役員と言っても、そのクラブチームはあま市内ではなくて、一宮市であるとかその近辺で活動しているクラブチームです。教員の働き方改革に関連して、特に小規模校においては部活動の種類が限られて、子供たちはなかなか自分が望む部活動に入ることができなかつたり、やりたい部活を長く続けられなかつたりという状況があります。一宮市においては、新しいクラブチームがいくつか出来上がってきています。新しくできるクラブチームは、女子専用のクラブチームなど、様々です。この部活動とクラブチームの問題については、ある意味待ったなしの差し迫った状況にあるものと理解しています。私が役員を務めるクラブチームも広域財団法人の認可を受けて</p>

			実施していて、国や県の指導を受けて活動をしています。学校で部活動を実施するに当たって、人的を含めて制限がある状況があるのであれば、クラブチームなどに任せることも選択肢としても良いのかなと思います。
6	1	山田委員長	<p>○ICTの活用により教職員が本来行わなくても良い業務を改善</p> <p>現在スクールサポーターが配置されているとのこと、かなり手厚い施策であると思います。ポイントは、教員が本来行わなくてもよい業務の洗い出しと改善であると思います。</p> <p>特に事務にかかわることは、ICT活用で大幅に改善できると思います。保護者とのやり取りにもICTは効果的です。校務のICT化から始め、保護者や教育委員会との連携にも大いにICTを活用すべきと考えます。スマート社会にふさわしい働き方の原型づくりが最優先と思います。</p>
6	1	小林副委員長	<p>○大掛かりな制度の変更などを伴わず、迅速に実行していける改善策も出せるのではないか</p> <p>私は⑤⑥を最優先、続けて③④、そして①②の順とさせていただきます。</p> <p>ICT環境の整備や働き方改革は、現在の先生方や児童生徒のみなさんの教育活動に直結するものであり、喫緊に改善策を実行していくべき点もあるものと思います。また、大掛かりな制度の変更などを伴わず、迅速に実行していける改善策も出せるのではないのでしょうか。今必要なことであり、できることからやっていくという観点で、まずは⑤⑥について、集中的かつ優先的に話し合ってはどうかと思います。</p>
6	1	溝口委員	<p>○民間はじめ外部から（学校への）依頼事業や保護者への対応等問題は多岐にわたる</p> <p>教職員の過重労働はいまさらといった感じであり、一概に解決できないが、教員数の不足が根本にあると思う。</p> <p>部活動の外部委託、民間はじめ外部からの依頼事業、保護者への対応等問題は多岐で疑問なことも多い。学校（教員）には依頼しやすい風潮？現場教員の意見は？</p>
6	1	安江委員	<p>○部活動指導員について</p> <p>近年、働き方改革が社会的に叫ばれ、それに伴い、教員の働き方に世間の目が向けられるようになった。しかし、まだ十分ではなく、また私たち教員の意識もまだまだ高くないところがあるのも事実である。特に部活動については、部活動指導員が配置されたり、活動量に関する基準が策定されたりしたが、負担軽減には至っておらず、今後早急に、より具体的な取り組みを進めてい行きたいところである。</p>

テーマ	4. これからの学校・学校と学校・学校と地域のあり方
概要	<p>①学校と家庭と地域のあり方</p> <p>(開かれた学校づくり)</p> <p>学校、家庭及び地域のあり方。コミュニティスクール。学校運営協議会の在り方。家庭及び地域と協働で運営する開かれた学校づくり。交流、連携、協働。あま市として一体となることができる学校。旧町の垣根を越える懸け橋となる学校。</p>
目指す姿	<ul style="list-style-type: none"> ○“繋ぐ”がポイントである。学校と地域をつなぐところが、あまりうまく機能していないのではないかと。繋いでいく役割となる地域コーディネーターが各学校に一人割り当てられると大きく変化する。(山田委員長) ○学校内外の人的資源をイベントだけでなく授業の中でも活用していければ良い。地域もPTAも保護者も人的資源として積極的に活用していけたら良い。(山田委員長) ○地域コーディネーターが大きく活躍できる学校運営協議会づくりが重要。(山田委員長) ○学校での活動や授業をオンラインで保護者だけでなく地域へも視聴可能とし、より開かれた学校を作る。(山田委員長) ○学校運営協議会の活動を広報する仕組みが必要である。ウェブサイト、ブログ等ICTを活用した広報手段により、地域や保護者に活動内容を知ってもらう必要がある。(山田委員長) ○あま市として一体となる学校づくり、地域全体でのチーム学校という姿の実現を目指していくとよい。(小林副委員長) ○学校の中で教えなければならないコンテンツが多様化しているなか、専門性の高い地域の人材による出前授業の活用は有益であると考え。例えば、NPO法人ママプラスによるキッズ防犯の取り組みがあたる。他にも、キャリア教育や、金融教育や、プログラミングなど、地域の人材を活用できることがあるのではないかと。思う。(小林副委員長) ○地域の住民と学校が“顔の見える関係作り”ができると良い。(溝口委員) ○学校と地域が連携して生徒の学習に携わることは、効果の高い学習機会であり、どんどん実施した方がよいと考えている。(安江委員) ○子どもたちが安全に遊ぶことができる環境づくり。(古川委員) ○地域住民との交流の促進。(古川委員) ○学校施設の解放の拡大。(古川委員) ○学校、家庭、地域が連携するためのコミュニケーションを促進させる仕組み構築。(早川委員) ○放課後子供教室ではボランティア、地域の方、保護者の協力を得ている。(恒川委員) ○学校、家庭、地域と話し合うに際し、どうやったら子どものためになるのかという基本的な姿勢を持ち続けることが重要である。(恒川委員) ○保育園の地域の方々との関として園庭開放や介護施設の訪問、人権教室や手作りおもちゃ教室、小学生との交流を行っている。(溝口保育士長委員)
期待すること	<ul style="list-style-type: none"> ○学校運営協議会で地域コーディネーターが活躍し、できればPTA活動を経験した方が担うと良いのではないかと考える。PTA活動の経験を通じた家庭どうしの繋がりを期待したい。(山田委員長) ○市民活動を行っている団体等には、学校でそれら活動に関わる内容等を子供たちに伝えたい、教えたいというニーズはあると思われる。(小林副委員長) ○地域の住民のなかには、学校の子どものためであれば努力を惜しまないという方は多くいると思う。(溝口委員) ○中学校では生徒が地域に出て行って、職場体験学習を行っている。職場体験学習や職業講話の前と後では子どもたちの心構えや態度に成長がみられる。社会と触れ合うことで人としてどうあるべきかということを生徒は肌で学んでいると思う。学校全体が落ち着いてきて、学習効果に表れてきていると感じている。(安江委員) ○家族の絆を強めることを期待したい。(古川委員) ○安心して子どもたちを育てられる環境づくり。(古川委員) ○地域との関係を強化し、地域に開かれた学校への転換。(古川委員) ○学校、家庭、地域が問題を共有すること。(早川委員) ○地域が学校を支援することがもっと増えていいと思う。(恒川委員) ○保育園でも地域と関わる交流を行っており、交流を通じて園児の自己肯定感の育みを促進している。(溝口保育士長委員) ○園児は、体験を伴う活動により社会性が広がる。(溝口保育士長委員)

懸念すること	<ul style="list-style-type: none"> ○セキュリティの問題 (山田委員長) ○教えるべきカリキュラム、年間のプログラムが決まっているなかで、学校と講師でどのように調整していくのが、課題。(小林副委員長) ○学校はかなりの過密スケジュールであり、外部から見ると総合の時間など挿入することが可能なのではないかと見えがちであるが、実際は細かくカリキュラムを割り当てており、生徒は思われているより忙しい。早めに翌年度の計画段階から打ち合わせを重ねて実施できるとよい。(安江委員) ○学校任せとならないか心配する。(早川委員) ○子供中心であるべきだが、大人の力や想いが大きくなりすぎて、大人中心となることが心配される。(恒川委員) ○子供教室においては、学校での人間関係が放課後子供教室でも継続するため、配慮を必要とし、情報交換をするための仕組みがあると良い。(恒川委員)
課題	<ul style="list-style-type: none"> ○学校運営協議会がさらなる活躍ができるよう教育委員会からのバックアップを行うことができる仕組みづくり。(山田委員長) ○地域の中で、学校に関わっても良い、関わりたいと考えている方を探して学校とつなげることができれば、活動も広がりを見せる。(山田委員長) ○学校や学校運営協議会が行っている内容を地域や保護者に広報する仕組み。(山田委員長) ○出前授業の講師と学校との調整は大変なので、間を取り持つような仕組みがあると良いのではないかと。(小林副委員長) ○地域と学校が“顔の見える関係作り”ができる仕組みがあると良い。学校運営協議会がさらに活用され、本音で話し合える会となしてほしい。(溝口委員) ○地域の住民からすると、まだまだ学校は敷居が高いと感じている方が多い。(溝口委員) ○私立の幼稚園と公立の学校では、勝手が違ってはくるものの、園で行っていることを家庭にどうやって伝えていくのかは大きな課題である。現在行っている内容としては、保護者への園庭開放や活動内容のブログの更新があるが、ブログにおける園児の写真のプライバシーについては、かなりの配慮を必要とする。(林委員) ○家族構成や、保護者の働き方、家族の在り方の変化に伴い、子育ての負担が増しているのか、家族の絆をどうやって強めていくのか。(古川委員) ○学校が連携する相手方としての地域コミュニティの強化。(古川委員)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の人材による授業や講師等を活用することにより、学校の負担は減るものなのか増えるものなのか。(小林副委員長) ↓ ○年間カリキュラムのなかで事前から調整し、計画的に実施することにより、学校の負担はあまり増えないのではないかと予想する。(安江委員) ○地域と学校の協働にあたり、ボランティアを基本として考えるものか、場合と内容によっては予算は付き得るのか。(小林副委員長) ↓ ○第二次総合計画では、モットーとして市民協働がある。教育のカテゴリであっても、協働でまちづくりをしていこう、より良くしていこうという活動については、補助金なり別な形なりでの予算措置はあり得ると考える。(古川委員)

テーマ	4. これからの学校・学校と学校・学校と地域のあり方
概要	<p>②学校間交流のあり方</p> <p>(学校間交流) 学校間交流のあり方。行事、授業、イベント等の共同開催。あま市として一体となる事ができる学校間交流。小1プロブレム、中1ギャップの問題。幼保小高社会の交流のあり方。</p>
目指す姿	<ul style="list-style-type: none"> ○教科担任制の導入により、さらに教職員不足が起きることは避けることができない。そのようななか、教職員間での学校間交流は行う必要がある。(山田委員長) ○幼稚園、保育園でこれだけできたのに、小学校にあがったら途端にできなくなってしまうことが往々にしてある。幼稚園で行っていたこと、保育園で行っていたことの情報に小学校に繋がっていくことが必要である。(山田委員長) ○幼稚園、保育園から小学校、中学校へ連続して継続した記録をとる仕組みが必要である。ニュージーランドの事例では、幼稚園では専門の職員を充てて園児の記録を取っている。それは、ネガティブな情報ばかりなのではなく、こんなことが出来た、出来るといった保護者にも見せることが出来るような情報で、写真を伴ったものである。これらの情報は、そのまま小学校へ中学校へ持ち上がって行って、一貫した教育を行うための資料となる。ICT機器を用いて、このような仕組みがこれからは必要となるかと思う。(山田委員長) ○理由、目的をはっきりとさせる必要があり、中1ギャップ、小1プロブレムの解消のために学校どうしが共同して行うことは良いと考える。(小林副委員長) ○あま市全体で学校交流ができると良いと考える。(小林副委員長) ○幼保と小学校、小学校と中学校との交流をまず先に考えた方がよい。それが熟してから学校間の交流を図るのでよいと考える。(溝口委員) ○児童生徒の交流も重要であるが、小学校、中学校の職員同士の交流及び情報共有や連携も必要である。(安江委員) ○交流の活動は、単発ではなく、継続性や回数をこなすことが必要であると考え。(古川委員) ○コロナ禍を経て、リモートによる交流も一層増えていくのではないかと。選択肢が増えることにより、市内だけでなく市外、海外へも交流が可能となるのではないかと。(恒川委員) ○幼保小連絡協議会によって、保育園と就学予定の小学校の職員が情報共有を行うことができるのは、職員にとっても安心できるし、児童生徒の円滑な入学に寄与していると考えている。(溝口保育士長委員) ○コロナにより、学校間交流のあり方は大きく変わった。タブレットの全員配布により、自校に居ながら他の場所との交流が可能となった。(教育長) ○市内小学校では、郷土の戦国武将を題材に生誕の地である市内小学校と終焉の地である他県の小学校と交流をICTを用いて行った事例がある。(教育長) ○特別支援教育においてICTを用いて交流を行った事例がある。(教育長) ○ICTも用いて交流のあり方は大きく変わって、今まで行っていた交流についても学校の負担は軽減された。 ○教育委員会のサポートを得て複数校がICTを用いて共同で行った事例もある。(教育長)
期待すること	<ul style="list-style-type: none"> ○幼稚園、保育園と小学校の職員がお互いに行っている内容について共有することは、それぞれの学齢における主体的で対話的な深い学びに寄与すると考える。合同研修を行うなどすることも良いと考える。(山田委員長) ○あま発未来創造塾において、地元の大学生と話す機会があるが、それぞれの旧町のことはよくわかっていても、あま市内の旧他町のことはあまり良く分かっていないことが多い。小中学生のころから市内において距離のある学校との交流を通じて市内の他地区のことを知る機会があると良い。市全体の魅力を皆が共有できることは、地域に愛着を持つきっかけになるのではないかと考える。(小林副委員長) ○学校の行事としてだけでなく、幼保、小中、高大、社会と長いスパンの対象者を想定した地域の行事と考えることも良いのではないかと。(小林副委員長) ○中高生が、園児と触れ合う職場体験学習は、中高生にとっても道徳教育、社会体験としても良いことだと考えている。また、園としても人手不足の幼児教育業界に興味を持ってもらうきっかけにもなると考えている。(林委員) ○中高生のうちに幼児、子どもに触れることで、子どもが可愛いと思う心を醸成し、将来子どもを持つとおもう気持ちを増させるわずかな一助になるのではと思っている。(林委員) ○何かこれをすれば小1プロブレムや中1ギャップが解消できるというようなものは、おそらくないと思うが、少なくとも学校間交流によって、新たな友達や交友関係を子供たちが

	<p>気づくことができるきっかけになるのではないかと期待する。(古川委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○普段会うことのない同年代の子どもたちの交流により、児童生徒が社会性を育む機会になるのではないかと期待する。(古川委員) ○学校間の職員同士の交流は、教育の質の向上が見込めるのではないかと期待する。(古川委員) ○あま市域はけっして広くはないものの、その限られた市域の中でも旧町の区分けに限らず、それぞれの住民の文化は異なっている。それらの同じ市内に住み、近くにいるにもかかわらず異なる文化について知るいい機会となるのではないかと期待する。(早川委員) ○市長と語ろうあまの未来においても、児童生徒や学校は事前準備をし、児童生徒は目を輝かせて市長に積極的に質問をする様子が見受けられる。同世代の児童生徒間で交流が図られれば、さらに互いに刺激し合い、理解を深め合い、互いの価値観、文化について分かり合えるのではないかと期待する。(早川委員) ○新しい交流により、新しい学びの手段が増え、児童生徒の選択肢が増える。(恒川委員) ○保育園の年長さんは、みな小学校にあがることを楽しみにしている。ぜひ、小1プロブレムといったことが極力起きないように、情報交換や交流を進めていただきたい。(恒川委員) ○コロナ禍以前は、保育園児が入学する予定の小学校に行き、当該校の小学生と交流し、園児は実際に教室に入って椅子に座ったりと、様々な体験をする機会があった。実際に小学校にいった体験することができることは、園児にとっても貴重な体験であり、安心できる材料となっていた。今後再び復活できるとよいと思う。(溝口保育士長委員) ○中学生による保育園への職場体験は復活することができ、園児にとっても良い刺激となった。(溝口保育士長委員)
懸念すること	<ul style="list-style-type: none"> ○大変いいことだとは思いますが、それにより学校の負担が増すことがあってはいけないと考える。(溝口委員)(恒川委員) ○小1プロブレム、中1ギャップを極力解消しようと考えれば、複数回の交流が必要になってくるかと思われるが、小学校中学校共にスケジュールやカリキュラム的に複数回の交流をする時間を確保することは困難であると思われる。(安江委員) ○継続的な交流活動により、学校の負担が増大することを心配する。(古川委員) ○財政的な負担と学校間の連絡調整による学校の負担、ICTを活用するにしても専門的スキルを要することなどの懸念がある。(早川委員)
課題	<ul style="list-style-type: none"> ○幼稚園、保育園段階から小学校、中学校までの園児、児童生徒の記録を連携、継続する仕組みが弱い又は無いのではないかと。(山田委員長) ○何のためにやるのかと、学校の負担のバランスをよく考えて行うことが必要。(小林副委員長) ○事業実施にあたり費用がかかってくるが、限られた予算の中で当該事業にどれだけの予算を割り当てることとするのか、予算規模に合わせて事業を縮小するものか。(古川委員) ○交流を進める相手をどのように探すか、どのようなテーマを設定するのか。具体的なイメージと手段を事前にしっかりと企画しなければならない。(恒川委員)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○幼稚園としては、あまり幼稚園同士の交流を行ってはいない。(林委員) ○幼稚園に小学校の先生が新一年生の情報を聞きに来たり、電話等で照会されることはあり、その都度お答えしている。(林委員) ○幼稚園に中学生や高校生が職場体験学習として来ることはあるが、園児たちも喜ぶので積極的に受け入れている。(林委員) ○保育園への職場体験は、受け入れているし、今後もその予定である。(恒川委員) ○甚西小の標語の掲示も学校からの依頼で保育園において行っている。(恒川委員)

テーマ	4. これからの学校・学校と学校・学校と地域のあり方
概要	<p>③特別支援教育における学校のあり方</p> <p>(特別支援教育・不応・不登校・引きこもり支援)</p> <p>出生前～乳幼児～幼保～小～中一貫した体系的な支援と情報の共有。インクルーシブ教育システム。スクールソーシャルワーカーの活用。社会福祉課障害福祉係、子育て支援課、保健センター、教育支援員会、適応指導教室、療養棟連絡会議、学校間連携協議会、幼保小連絡協議会、子ども・若者支援窓口、生活困窮者自立支援窓口、社会福協議会との連携。不登校のICT利活用。</p>
目指す姿	<ul style="list-style-type: none"> ○現場の教職員の方々が一番苦慮しているのは、通常級にいる発達障害の児童生徒であろうと推察する。ここが引き金となって、学級崩壊につながることもある。対応のあり方を教職員が間違えると良くない結果を引き起こすことがある。(山田委員長) ○適応指導教室が、市内にもある。また、学校内にも適応指導教室に準じるような教室がある学校もある。普通教室、校内の適応指導教室、市の適応指導教室を自由に行き来できるようになると良い。(山田委員長) ○校区で1つ適応指導教室ができて、専属の教職員が配置されると良い。(山田委員長) ○インクルーシブ教育システムが推進されていくことが重要である。(小林副委員長) ○現在行っている取組は、推進して行っていただきたい。(小林副委員長) ○違いに関する認識の違いなど、価値観の多様性が重要であるため、仕組みだけでなく、児童生徒の理解を促進するような教育の内容が大切である。(小林副委員長) ○児童生徒の特性に応じた教育が必要である。(古川委員) ○保育園や小学校に医療的ケア児のための予算措置をしている。(古川委員) ○あま市の小中学校はスクールサポーターに他市と比べてあつく予算がついている。(古川委員) ○障害等を持つ児童生徒への合理的配慮のための予算は必要である。(古川委員) ○児童生徒一人一人に合わせた教育プログラムの提供が必要となる。(早川委員) ○偏見や差別を撤廃するためには、広く皆に知って頂くということが大切であるため、市の広報広聴の手段を用いて市民に知って頂くこともできる。(早川委員) ○保育園に関しては、入園又は在園に際し、療育の会議を開いて保護者の意見も聞きながら対応を検討している。(恒川委員) ○個人として野球の地域スポーツ活動を行っているが、引きこもって学校に行けていない子が在籍している。ある時は来れたり、しばらく来れなかったりするが、外に出るきっかけにしてくれている。(恒川委員) ○小さなきっかけから学校に行けなくなるケースもある。子どものSOSを早期に気づいて、どのような支援が必要か検討し、その原因に対処できるようにする。(溝口保育士長委員) ○学校に行きにくい子どもたちの居場所となるフリースクールのような場所があると良いと思う。そして、それが少しでも外に出るきっかけとなればと考える。(溝口保育士長委員)
期待すること	<ul style="list-style-type: none"> ○校内の適応指導教室の開設は、空き教室活用にもなる。(山田委員長) ○教育相談センターが大きな役割を果たしていると承知しているが、相談員、支援員の数を増やして欲しい。(溝口委員) ○教育相談センターの相談員、支援員の方は、あま市の小中学校の学校現場を経験した方になって頂けると、地域特性もわかって実施していただけるのではと思う。(溝口委員) →臨床心理士を除く支援員等は現在はあま市教職員を経験した方をお願いしている。(教育長) ○教育相談センターから支援員が巡回して、特別支援学級の担任や学校の教職員に適切なアドバイスや支援を行っていただいていることは、有り難い。(安江委員) ○ICTを活用して活用していければ良いと思う。(恒川委員) ○保育園としても、療育を必要とする園児の情報を小学校としっかりと共有連携していく取り組みを継続したい。早期に対処して、不登校につながらないようにできたらよいと感じている。(溝口保育士長委員)
懸念すること	<ul style="list-style-type: none"> ○教職員に知識が十分にあるのかが課題である。しっかりと勉強しなければならない。なんでもかんでも一緒にすればよいわけではなく、正しくインクルーシブ教育を行わなければ、子どもたちにとっても良い結果をもたらさない。(安江委員) ○保育園に関しては、保育園や子育て支援課のみで対応できる範囲には限界があるため、様々な機関と連携して対応に当たる必要がある。(恒川委員)

<p>課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○いわゆるグレーゾーンにある児童生徒が、成長していく過程や、卒業後に、病識・障がい識がないためにこんなはずじゃなかったと混乱や悩みを抱えることもあるため、学齢期から正しい知識を有した教職員による導きが必要であり、そのために教育相談センターの支援を要する。(安江委員) ○幼稚園については、特別支援学級というように別にクラスを設けることはしていないため、一般のクラスの中でクラス担任が教育に当たっている。大学の先生など講師に招いて研修を行うが、慢性的な人材不足ななか対応に苦慮していることはある。自園のみではなく、障がい児施設等と併用している例が多い。(林委員) ○専門的知識を有する人員を確保することは困難である状況がある。(古川委員) ○障害を有する児童生徒や保護者に対する偏見や差別を払しょくできるような取り組みも必要ではないか。(古川委員) ○児童生徒一人一人への教育プログラムの提供にあたり、児童生徒及び教職員へのサポートが必要である。(早川委員) ○障害児、者への偏見や差別を撤廃しなくてはならない。(早川委員)
<p>その他</p>	

テーマ	5. ICT利活用における学校のあり方
概要	<p>① ICT利活用</p> <p>(ICT利活用)</p> <p>学校内、学校外のネットワーク、ICT利活用のあり方。情報モラル教育、デジタルシティズンシップ教育。市内・市外学校間交流におけるICT利活用。タブレット端末の家庭への持ち帰りや利用方法や安全性の確保。不登校対策、特別支援教育のICT利活用。プログラミング教育。授業におけるICT利活用。</p>
目指す姿	<ul style="list-style-type: none"> ○そもそも授業スタイルを変えないとICT機器の活用はすすまない。(山田委員長) ○教職員がいくらスキルを上げて行っても、使用するのは子どもたちなので、子どもたちのスキルアップを考えなくてはならない。(山田委員長) ○ICT支援員が大きな役割を果たす。一人でも二人でも増やして行って児童生徒のスキルアップのため活用してもらいたい。(山田委員長) ○ICT機器を学校生活の中でも使っていく形に変革すれば、児童生徒の活用スキルが増大するきっかけになる。(山田委員長) ○児童生徒の学習履歴を残して行って、自ら何が出来て、何が出来なかったのか振り返りができるようになると良い。また、その学習履歴(ログ)は、小学校から中学校へしっかりと継続していく必要がある。(山田委員長) ○デジタルシティズンシップが必要である。情報モラルの時代の、これはダメ、あれはダメではなく、こうやって使える、こうも使えるという視点への移行が必要である。(山田委員長) ○学校の中での利活用は、段階を経て進んでいっていると聞いている。しかし、教育DXが進んでいない。教育DXは仕組みの話だと思うので、先進事例を参考にしながら、どんどん取り入れて行ってほしい。(小林副委員長) ○先進事例をとりあえず取り入れてみて、その後使いながら、慣れていくのと同時にあま市の学校に合わせていくのもいいと思う。(小林副委員長) ○どんどん良い使い方が新しく見いだされて行って、様々な学校の場面で使用して行ければ良いと思う。(安江委員) ○幼稚園においては、園側もさることながら、保護者側もICT機器は普及している状況があり、手書きの書類については、ほぼなしとすることができた。(林委員) ○幼稚園への朝の欠席等の保護者から園への連絡も全てICT機器を用いて行う。(林委員) ○幼稚園から保護者にプリントを配布することもほとんどなく、ICT機器を用いてお知らせを配布している。(林委員)
期待すること	<ul style="list-style-type: none"> ○毎日の体温測定結果の報告などの体調管理にICT機器を用いたり、連絡帳を辞めてタブレットに打ち込むようにして保護者との連絡としたり、子どもたちにICT機器を用いて日記を書かせるなど学校生活でのICT機器利用をすすめる必要がある。(山田委員長) ○AIなどもどんどん活用して知識を蓄えて行くと良い。(山田委員長) ○児童生徒が、自分で課題を見つけて、自分で調べていく形が取れると良い。(山田委員長) ○主体的で対話的で深い学びを実践するため、児童生徒間の授業中を含めたコミュニケーションを図るツールとして期待しているし、コロナ禍においては大きく活躍した。(安江委員) ○授業中など注目される中一人ではなかなか意見を出しづらい児童生徒もいるなか、ICTを用いることにより、意見を出しやすくなる。(安江委員) ○ICT機器を用いて、業務効率の向上や情報共有の改善が推進されているが、さらにそれを促進していく必要がある。(古川委員) ○ICT機器を用いることで、距離や時間に制約されない教育活動が可能となると期待する。(古川委員) ○ICT機器をしっかり活用して効率化を図りたい。(溝口保育士長委員)
懸念すること	<ul style="list-style-type: none"> ○ICT機器等の増大により、必要な予算がどんどん増大していく。(古川委員) ○教職員のICT機器利活用能力もレベルアップして行かなくてはならない。(古川委員)
課題	<ul style="list-style-type: none"> ○必要な情報をしっかり守るセキュリティを整えなくてはならない。(古川委員)(早川委員) ○教職員、児童生徒のICT機器及び情報の取り扱いについてルール作りを更新すること、その内容の徹底を図る必要がある。(早川委員)
その他	

テーマ	6. 教職員の働く場としての学校のあり方
概要	<p>①教職員の働き方改革</p> <p>(教職員の働き方改革)</p> <p>教職員の勤務時間。労働者としての教職員の職場環境。障害者雇用率。メンタルヘルス。教材、ノウハウ等の継承・蓄積。自校作成の教材等の再利用。チームとしての学校。</p>
目指す姿	<p>○そもそもの視点として、働き方改革を何のためにやっているかという点、教職員が早く帰るためにやっているわけではなく、子どもたちと向き合う時間を確保するために行っていることを改めて確認する必要がある。(山田委員長)</p> <p>○もっとも重要なのは、教職員の意識である。ICT機器を活用しきれず、未だ非効率的な紙による事務を行っている方もいると聞く。現場において教職員を先導する役割を担う方が必要であろう。また、研修の場を毎年もうける必要がある。(山田委員長)</p> <p>○教職員の一日のタイムマネジメントの意識が必要。(山田委員長)</p> <p>○教職員の働き方改革については、あま市は様々な取り組みをしている。先生方の勤務時間の意識化と見える化を図っているところです。改善については道半ばといえますが、当初よりは長時間勤務はかなり減ってきたと言える。(教育長)</p> <p>○教職員が必ずやらなければならない業務以外は、できるだけ教職員以外の手によって実施していく方向としたい。(教育長)</p> <p>○地域毎の取組や地域ごとの課題もあると思われる。何が問題で、何を改善していくのかについて、現場の声をしっかりと拾い上げていく必要があると思われる。(小林副委員長)</p> <p>○可視化する取組は必要である。(小林副委員長)</p> <p>○可視化した問題や、取組は市民にも広報し、理解と協力を得られるとよい。(小林副委員長)</p> <p>○ICT支援員に授業の中での使い方だけではなく、教育DXに代表される働き方をデザインするようなICT機器の利活用方法のアドバイスが得られると良い。(小林副委員長)</p> <p>○教職員の本務以外の仕事が多すぎるのではないかと。(溝口委員)</p> <p>○事務的な仕事のうち、教職員の本務以外の仕事が多いのではないかと。(溝口委員)</p> <p>○そもそもの教員数が少ないのではないかと考える。(溝口委員)</p> <p>○コロナ禍を経て、学校行事や業務も必要か否かの検討を経て、削減されている。(安江委員)</p> <p>○幼稚園においては、保護者等との連携をするためのアプリの導入がとても大きな役割を果たして、事務量が劇的に軽減した。(林委員)</p> <p>○幼稚園については、小中学校よりも保護者が在園中の様子を知りたいという要求が大きいため、教職員のタブレット端末やカメラ機能を活用して、保護者への情報提供の手段としている。(林委員)</p> <p>○ICT機器等の積極的導入と利活用。(早川委員)</p>
期待すること	<p>○教育DXにより新しいツールで効率化していく取り組みをすすめたい。(小林副委員長)</p> <p>○教育DXなどの活用により、教職員の本務以外の、特に事務的な仕事が軽減されることを期待したい。(溝口委員) (溝口保育士長委員)</p> <p>○事務仕事についても、必要か否かの検討をして精選して行ってほしい。(安江委員)</p> <p>○幼稚園業界においては、産休育休の取得が進んでいなかった現状があるが、慢性的な人手不足のなかで、働きやすい環境を整えるためにも、進めて行っている。(林委員)</p> <p>○テレワークやフレックス勤務の促進。(古川委員)</p> <p>○職場環境の改善は、職員のモチベーション上昇に寄与する。(古川委員) (早川委員)</p>
懸念すること	
課題	○教職員の職場環境改善のためにも、老朽化した学校施設の改善を進めたい。(古川委員)
その他	○保育園の業界も人手不足は深刻で、職場環境の改善は課題である。(恒川委員)

テーマ	6. 教職員の働く場としての学校のあり方
概要	<p>②部活動のアウトソーシング</p> <p>(部活動のアウトソーシング)</p> <p>小学校又は中学校の部活動の指導を外部スポーツ団体等にアウトソーシングし、教職員による指導を廃止することについて。</p>
目指す姿	<p>○中小学校体育連盟のありかたを考える必要がある。(山田委員長)</p> <p>○受け皿となる地域のクラブチームを育成していく必要がある。(山田委員長)</p> <p>○児童生徒がやりたい事をやれるように文化系を含め選択肢を示せるようにしてあげたい。(山田委員長)</p> <p>○国の勢いはトーンダウンしてきていて、今すぐ実施するというものではなくなった。令和5年度から教職員の課題検討委員会を開催し、現場の意見を聴取することとした。(教育長)</p> <p>○現在は、学習指導要領のなかに中学校の部活動は位置付けられている。(教育長)</p> <p>○国内スポーツにおける小中学校部活動の果たしている役割と文化という側面も考慮の一つとする必要があると思われる。(教育長)</p> <p>○外に出すということがこれから検討されるということだが、既存の部活動の枠組みにとらわれずに、もっと市民と連携することを考えては。例えば、あま市で行われている歴史ガイドボランティアのように現在の部活動にはないもので、外部の識者等の協力を得て新しい部活の可能性が広げられることもあるのではないかと思う。(小林副委員長)</p> <p>○ボランティア部とは違う枠組みで、地域のボランティア活動をされている人材と連携することで、部活動が新しい学びの場として広がるのではないか。また、特色ある学校づくりにもつながるのではないか。(小林副委員長)</p> <p>○学校運営協議会を積極的に活用してほしい。(古川委員)</p> <p>○他市で部活動OB、OGが指導者補助として既に地域住民として支援している取組もある。(溝口保育士長委員)</p>
期待すること	<p>○正規の勤務終了時間に近づけていけるようにしたい。(安江委員)</p> <p>○教員の本分は、教科指導にあると考える。(安江委員)</p> <p>○地域住民や団体に積極的に関与していただき、地域との交流を促進される。(古川委員)</p> <p>○そもそも先生の負担が軽減されるということは良いことであると考えている。(恒川委員)</p>
懸念すること	<p>○部活動を通して子どもが成長するという側面もあると思う。もちろん部活動のみではないが、部活動の果たす役割もあると思う。(溝口委員)</p> <p>○教科、専門以外の部分による児童生徒と教職員の交流を通して、児童生徒も教職員も成長していく場である役割も担ってきているのではないかと感じている。(溝口委員)</p> <p>○公的予算をかけて実施するのか、個人から費用を徴収するのか、運営経費のありかたを考慮する必要がある。(古川委員)(早川委員)</p> <p>○これまで、青少年の健全育成の場でもあった部活動が、単なる趣味やスポーツのみの場となるのであれば、その分になってきた役割の場がなくなる。(早川委員)</p> <p>○中学校の時の部活動の仲間は、公立学校であると地縁による先輩後輩でもあり、その後長く続く人間関係に発展しうる。(恒川委員)</p> <p>○部活動部分で私立学校と公立学校の格差が大きくなる。(恒川委員)</p>
課題	<p>○新たな部活動の場における指導者と児童生徒のコミュニケーションを円滑かつ必要分とることができるような仕組みがあると良い。(早川委員)</p> <p>○自信が他市でスポーツクラブの指導者をしているが、部活動の受け皿としてあり方が変わってくることもあり、学校だけでなくスポーツクラブ側のやり方が大きく変わる。(恒川委員)</p> <p>○公費負担でなく、私費負担となった場合の低所得世帯への配慮。(恒川委員)</p>
その他	